

地域における学歴意識の変容

—戦前期日本における生活世界の学校化—

東京大学教育社会学研究室 天 野 郁 夫

大阪教育大学教育学部 志 水 宏 吉

東京大学教育社会学研究室 吉 田 文

南山大学文学部 広 田 照 幸

The Rise and Institutionalization of Educational Credentialism in Modern Japan

—A Case Study on the Permeation of Educational Credentialism in the
“Life World” of the People—

Ikuo AMANO, Koukichi SHIMIZU, Aya YOSHIDA and Teruyuki HIROTA

The rise of educational credentialism is closely linked with the development of modern bureaucratic organizations, such as government agencies and large enterprises. In employment and promotion of personnels in these organizations, educational credentials are made great account as the index of their potential vocational abilities. In Japan as well as in other industrial countries, educational credentialism, which emerged in the process of modernization, after the Meiji Restoration, was institutionalized in the central government agencies at first, and in the Zaibatsu enterprises thereafter. In Japan, however, the institutionalization and domination of educational credentialism was not confined to the world of modern organizations. It rapidly permeated the daily “life world” of ordinary people who were not connected with these organizations.

In this paper, we will trace the process of permeation of educational credentialism among the “life world” of people, by focusing on three status groups : the Shizoku (former Samurai), merchants and farmers in a small local community, “Tanba Sasayama”, in Hyogo Prefecture.

はじめに

本研究のねらいは、近代化の開始とともに登場してきたイデオロギーとしての学歴主義が、人々の日常生活のなかに、浸透し、汎化し、教育や学歴に対する価値意識を形成し変容させ、行動様式を規定するようになっていく過程を、人々の生活世界のなかにあとづけることにある。

この数年、我々は学歴主義の汎化と制度化が、わが国の社会において進行してきた歴史的な過程をあとづけるための作業を、丹波篠山というひとつの地域についてさまざ

まな視点から進めてきた。この一連の研究の結果の一部はすでに「近代日本における学歴主義の制度化過程の研究—篠山鳳鳴義塾を事例として—」として、本紀要第27巻（1987）に発表した。地域における—中等教育機関の生成と発展の事例を中心に、わが国の学校教育制度における学歴主義イデオロギーの制度化の過程を読みとろうと試みたのが、上記の論文だが、本論文は、視点を地域の住民の側に移し、かれらの日常の生活世界のなかに、学歴主義の浸透と汎化の過程をあとづけようとするものである。

丹波篠山という地域の特性と、そこで我々がとった調査の対象、方法について詳細については次章にゆずるとし

て、我々がなぜひとつの地域を特定し、しかも「旧士族層」「商家」「農家」という3つの社会層ないし社会集団をとり出し、問題にするのかについて研究のねらいとの関連で、若干のコメントを加えておくことにしたい。

教育社会学における学歴、ないし学歴主義研究の流れについての、全体的で批判的な検討は、別の機会にまつこととして、学歴主義の制度化に関する従来の研究についていえば、それは、(1)近代組織、(2)高等教育、(3)エリート・新中産階級、(4)男性に、強い偏りをもって進められてきたといわねばならない。学歴主義が近代化の開始とともに現われ、学歴が官庁や企業に代表される近代的組織の職員層になるための「ビザ」として重要性をもち、しかも近代化とともに成長していくこの職員層の一員になることが、同時に新中産階級に加わり、エリート候補者となるための、もっとも「正統的」な道であることからすれば、それは当然のことといえるかも知れない。しかしそれはあくまでも、学歴主義にかかわる問題の一面をとらえているにすぎない。なぜなら、それは全体社会のなかの、重要ではあるが限られた部分を問題にしているにすぎず、学歴主義の重要性は、それが社会の特定の層や集団、組織にとどまらず、社会の大多数の構成員の、日常生活世界にまで浸透し、人々の意識や行動を規定しているところにあるのだからである。

近代化の開始当初の時期には、学歴は特定の限られた職業、限られた組織に属し、それをめざす人々だけの問題であった。学歴とも学歴主義とも無縁な生活を送っている人たちが圧倒的に、多数をしめていたのである。学歴と学歴主義の支配する、この小さな世界は、近代化の進展とともに着実に境界を、学歴とも学歴主義とも無縁な世界にむけておし広げていく。それは学歴に関心をもち、学歴の重要性を意識し、学歴を、なによりも近代化とともに、肥大していく職業や組織、集団への「ビザ」として、獲得し、利用しようとする人々の数がふえていく過程と重なりあっている。学歴主義の制度化の過程をあとづけようというのなら、我々は学歴の支配のすでに確立された世界だけでなく、あるいはそれ以上に、学歴と無縁な、社会の「多数派」が生活する世界——それは(1)伝統の支配する非組織の、(2)旧中産階級や一般民衆の住む世界であり、また(3)人口の半数をしめる女性の、さらには(4)中等教育以下の学歴の世界である——に目を向け、重視しなければならない。そして、我々が今回、丹波篠山という近代化・産業化の「センター」から遠い、その波から(相対的に)とり残された地域の、しかも、旧士族、商家、農家の3つの社会集団を調査対象として選んだ理由も、この点にある。

その3つの社会集団のうち、旧士族はいまひとつの集

団とみることはできない。しかし、近代化の初期段階において、かれらは独自の文化一価値観や教養、行動様式をもった身分集団であり、しかも学歴の重要性をいち早く認識し、学歴主義イデオロギーを積極的に受容したのが、かれらであったことはよく知られている。それはかれらが明治維新後の社会改革により、従来の身分の特徴をすべて失わない、社会的な「転生」を強いられた集団であったことと深くかかわっている。かれらが「転生」をめざした主要な職業は、官僚に代表される近代的な、組織のなかの被雇用の職業であり、学歴主義の制度化がまず始まったのも、こうした職業であった。かれらはその意味で、わが国の新中産階級の第一世代の主要部分をしめると同時に、学歴社会の最初の担い手でもあった。

成員となるには「ビザ」としての学歴が要求される、この新中産階級は、近代化の進展とともに成立し、厚みを増していく社会層である。そしてその成長とともに、成員の供給源は旧士族層、あるいはその後身としての新中産階級自身をこえて、旧中産階級へと広がっていく。学歴取得に必要とされるのは、知的能力である以上にアスピレーションと経済的能力である。家業・家産をもった旧中産階級の場合、たえず成長をとげていく新中産階級への「転生」の主流をしめたのは、階層的に言えば、商家・農家ともその中層、出生順位でいえば、家の継承者以外の子弟であったと思われる。旧中産階級のこの層は、産業化の進展とともに、たえず分解の危機に立たされる社会層であり、また子どもたちに分割・相続させるなどの資産も、もってはいない。近代化・産業化が進むほど、かれらもまた自分自身の、あるいは家族の一部の社会的な「転生」への「ビザ」としての学歴の重要性を意識せざるをえない社会層だったのである。

旧中産階級の主流をしめる商家と、地主をふくむ農家の上層は、家業・家産をもつがゆえに、少くとも近代化の初期段階には、学歴とは無縁な世界に生きていた、あるいは生きることのできた人たちである。その人たちの間に、学歴主義イデオロギーがどのように浸透し、学歴主義の制度化が進んでいくのか。旧士族と対比的に、商家と農家という2つの社会層を選んだのは、そうした問題意識からである。

明治維新から120年、第2次大戦での敗戦から40年近くをへたいま、我々は社会の階級間の境界が著しくあいまい化し、また高学歴化の進んだ社会に住んでいる。教育をふくめてさまざまな領域で平等化の進んだその社会は、学歴主義の制度化が極度に進み、学歴主義が、日常生活世界の隅々にまで浸透し、影を落している社会である。そうした学歴主義の社会、学歴社会が、どのようにして形成さ

れてきたのか、それを人々の生活世界のなかに、人々の意識と行動の基底にさぐりあててみたい。それが、我々の設定した研究の目標である。
(天野郁夫)

II. 調査の概要

以上のような問題意識にもとづいて、我々は、兵庫県篠山町を中心とする地域を対象に、二度にわたる現地調査を実施した。以下、その調査の概要を、「対象地域のプロフィール」・「調査の方法と内容」・「結果の概要」に分けて述べる。

1. 対象地域のプロフィール

篠山町は、県北東部の盆地に位置し、古くから京都と山陰を結ぶ交通の要衝として開け、江戸時代には譜代大名の城下町として栄えた。旧城下町の周辺には、米作を中心とする18カ村からなる農村地帯が広がっている。維新後は、産業化の波に呑みこまれることなく、比較的緩やかな社会・産業構造の変動を遂げてきた。篠山町の位置する多紀郡の人口は、維新以降戦前期を通じて、戸数約1万・人口約5万とほとんど増減がない。また、職業別の人口構成を見ても(表1)、明治33年と昭和5年との間に顕著な構成比率の差はなく、産業化の直接的な影響が小さかったことがわかる。

表1：多紀郡の職業別人口比率

	昭治33年	昭和5年
農 業	65	60
商 業	17	14
工 業	7	11
雑 業	9	12*
無 職	2	3
計 (%)	100	100

※「公務自由業」7%を含む

全体の6割を占める農業人口は、その三分の二が1町前後の自作農層で、地主層でも5～6町どまりと、農民の階層分化の度合いは小さかったと言ってよい。さらに冬季には、多くの農民が灘方面に丹波杜氏として酒づくりの出稼ぎに出ており、全体として農家層は比較的裕福であった。商業人口の大部分は、旧城下町を中心とする篠山町に集中していた。城下町特有の御用商人の流れをひく古い商家が

多く、業種は多岐にわたる。ただ、町自体の規模が小さいため、いわゆる大店はなかった。

戦前期において、郡内の教育機関は、小学校25校、中学校・高等女学校・実業学校が各1校ずつである。小学校は各村1校の割合で設立され、早くから就学率は高かった。明治33年の時点で、郡全体で9割を超えているが、これは兵庫県の平均の8割を上回っている。

中学校は、旧篠山藩々主青山忠誠の発意による篠山中学舎(明治9年設立)に源を有する鳳鳴義塾であり、制度的には明治19年私立各種学校、同32年私立中学、大正9年県立中学という変遷をたどっている。女学校は、明治45年多紀郡立高等女学校として発足するが、大正3～7年の間、実科高等女学校となり、大正8年に再び高等女学校にもどる。郡制の廃止にともない、大正11年に県立に移管される。実業学校は、昭和8年、組合立多紀実業高等公民学校として発足し、13年乙種2年制、16年に甲種3年制の実業学校に昇格した。

戦後の教育改革にともない、鳳鳴中学校と篠山高等女学校は合併して、県立篠山鳳鳴高校、実業学校は県立篠山農業高校から、篠山産業高校となり現在に至っている。その他、篠山町内に商業補習学校が、農村部1校の割合で農業補習学校が、小学校に付設されるかたちで設けられ、義務教育後の補習教育機関としての役割を果たした。これらは、昭和期にはいって青年学校に再編成される。

表2：多紀郡における義務教育後の進路分化

		小学校尋常科卒業率	小学校高等科入学率	鳳鳴中学入学率	高等女学校入学率	その他
大正2	男	96.7	68.6	11.5	—	19.9
	女	94.4	36.2	—	5.8	58.0
	計	96.6	53.1	—	—	—
大正14	男	92.1	76.6	14.7	—	8.7
	女	94.3	62.5	—	16.2	11.3
	計	93.2	69.7	—	—	—
昭和9	男	92.8	81.6	16.3	—	2.1
	女	99.8	71.8	—	17.4	10.8
	計	96.2	76.9	—	—	—

(『兵庫県統計書』より算出)

表2は、大正2年・同14年・昭和9年の3カ年における、多紀郡の小学校尋常科卒業者の進路を、6年前の尋常科入学者を母数として見たものである。ほとんどが尋常科を卒業し、男子では7～8割、女子では4～7割が高等科に進学している。中学校・高等女学校への進学率は、それぞれ

1～2割程度であり、中等教育機会はいまだ限られた層のものであったことがわかる。しかしながら、尋常科卒業後、高等科あるいは中等教育機関へ進学する者は着実に増加しており、社会変動が緩慢であったこの地域においても、義務教育以上の教育を受ける者の比率は着実に増加していった様子が見えてくる。

2. 調査の方法と内容

篠山地域における人々の学歴意識の変容過程を把握するため、我々は、1986年から87年にかけて、2度にわたって聞き取り調査を実施した。対象となったのは、この地に在住する明治末から昭和初期に生まれた人々である。対象者の選定は、「農家層」・「商家層」・「旧士族層」という3つの社会集団の別に行なった。

第一回調査 (1986年7月29日～8月10日)

農家については、2つの集落(篠山町に近接するS地区と10kmほど離れたK地区)の全戸聞き取りを行った。商家については、商工会名簿から古い商家(50年以上篠山で営業、が目安)をピックアップした。士族については、現在篠山町に在住していることが確認された旧士族の家系をもつ家が対象とされた。原則として、戸主である男性を聞き取りの対象者とすることにしたが、それぞれの事情により妻や息子が回答しているケースもある。その結果、農家S地区31名(うち女性15名、以下同様)、同K地区30名(10名)、商家25名(5名)、旧士族18名(8名)、計104名(38名)の回答を得ることができた。回答者の年齢は、明治26年～昭和16年生まれにわたっているが、大部分が明治30年代後半から昭和一ケタの世代にふくまれている。

主な質問項目は以下の通りである。

ハード面にかかわる項目(学歴・職歴等)：出生年、出生地、兄弟数、出生順位、家の職業、経済水準、学歴、職歴、結婚した年齢、配偶者の家の職業、配偶者の学歴、子どもの数、子どもの学歴・職業、兄弟の学歴・職業など。

ソフト面にかかわる項目(生活体験、意識等)：親のしつけのあり方、学校体験・思い出、子どものころの夢、同級生の進路、進路選択の理由・きっかけ、学歴に対する意識、士族意識(士族のみ)、子どもの教育に対する方針、現代の学校・教育に対する意見など。

なお、聞き取りは二人の調査員がペアになって行った。聞き取りの結果は、インタビュー後、メモをもとにフォーマット化された記入用紙に整理された。

第二回調査 (1987年3月21日～3月27日)

第一回調査で、典型的なライフコースをたどっていると思われた対象者に対して、再度インテンシブな聞き取り調査を実施した。対象となったのは、農家S地区5名(女性3名)、同K地区5名(3名)、商家8名(1名)、旧士族5名(3名)の計23名(10名)である。聞き取りは、比較的自由に対象者にライフヒストリーを語ってもらうという方法を採用した。聞き取りのなかみは、すべて録音された後テープ起こしされた。

3. 結果の概要

調査によって得られたデータを用いた詳細な分析は次章以降にゆずるとして、ここでは、得られたデータの基本的な性格とそれに付随する留意点、および分析の核となる、各世代における学歴の分布状況について簡単にふれておくことにする。

まず、農家層について。2つの集落の全戸聞き取りを行うという方針を採用したが、調査に応じてくれた家庭の比率は、S地区で46戸中31戸(67.7%)、K地区で48戸中30戸(62.5%)とともに6割台となっている。しかし、調査できなかった家庭が特に経済・社会的にある層に偏っているという事実はなく、得られたサンプルは一定の代表性を有しているとみなしてよい。調査不能の理由としては、老人の一人暮らしで回答ができない・昼間はつとめに出ていて留守・明らかな回答拒否、などが目立った。

表3：父親の職業

	専業農家	兼業農家	商・工業	教員・軍人	銀行員	職人	神官・僧侶	合計
K地区	23	3	1	0	0	1	2	30
S地区	22	1	5	2	1	1	0	32

表4：経済状態（農家）

	～5反	～9反	1町	～1町9反	2町～	自作	自小作	不明	合計
K地区	1	2	7	7	3	2	3	1	26
S地区	1	2	10	5	1	0	2	2	23

表3・表4は、両地区の対象者の父親の職業、および農家の経済状態をまとめたものである。表3から、篠山町に近いS地区の方に、若干近代セクターに属する職業が入りこんでいることがわかるが、大きな相違ではない。また表4からは、両地区の農家の経営規模がほぼ似通っていることがわかる。両地区の社会経済的な生活基盤は類似していると言ってよいだろう。さらにここでは具体的な数値はあげないが、本人・父親・配偶者・兄弟・子どもの学歴の分布状況を見ると、両地区がいずれについても著しく類似していることがわかる。そこで、以降の分析では、両地区で得られたデータを一括して、篠山町近郊の「農家」のものとして扱うことにする。

次に商家層については、先にも述べたように、篠山商工会の名簿をもとにサンプリングを行った。選定された商家は、転業を経験している家も少なくないが、現代まで命脈を保ってきたという意味で成功した商家だと言える。ただし、経営規模はそれほど大きくなく、家族主体の経営を行ってきた家がほとんどである。どのように家・家業を継承しようとしたか、その際に学校教育がどのような位置づけを有していたかという問題を考える時には、京都や大阪の大規模な商家（いわゆる大店）とは質的に異なる事情や論理が働いていたであろうことを、念頭においておく必要がある。

旧士族については、より一層の注意が必要である。士族という身分集団は、明治初年に法的に解体され、秩禄処分によって経済的な生活基盤を失い、新たな生活の途を模索しなければならなかった集団である。その一つの有力な方途として、俸給生活者へと道が通じている学校教育を最初に有効に利用したのが彼らであったことは、周知の通りである。篠山においても、明治初年の時点で多くの旧藩士とその家族が篠山の地を捨て、職を求めて都会へ、あるいは近郷の農村へ離散していった。したがって、本調査で把握することができた旧士族の家庭はきわめて限られた層であることをあらかじめ承知しておかねばならない。

次に、3つのグループの、各世代における学歴の分布状況を見ておくことにしよう。表5・表6・表7が、それぞれ、父親世代（対象者の父親）の学歴・本人世代（対象者自身）の学歴・子世代（対象者の子全員）の学歴分布を示している。なお、表5と表6については、「前

表5：父親の学歴

		初等	中等	高等	不明	計	
士族	前期	2	4	1	3	10	18
	後期	0	3	5	0	8	
商家	前期	8	2	2	2	14	25
	後期	5	1	0	5	11	
農家	前期	19	0	1	12	32	61
	後期	17	3	0	9	29	

(注1) 前期：本人の生年が大正9年以前

後期：本人の生年が大正10年以降

(注2) 初等：「学歴なし」をふくむ

表6：本人の学歴

			初等	中等(実業)	中等(普通)	高等	計	
士族	前期	男	0	0	3	2	5	10
		女	0	0	5	0	5	
	後期	男	0	1	3	1	5	8
		女	0	0	1	2	3	
商家	前期	男	2	2	3	4	11	14
		女	1	1	1	0	3	
	後期	男	1	0	5	4	10	11
		女	0	0	0	1	1	
農家	前期	男	8	1	2	2	13	32
		女	18	0	1	0	19	
	後期	男	10	4	6	2	22	29
		女	2	1	4	0	7	

(注1) 中等(実業)：「職業訓練所」、「裁縫学校」等をふくむ

中等(普通)：「師範」、「師範二部」をふくむ

期」(本人と生年が大正9年以前)と「後期」(本人の生年が大正10年以降)に分けて集計してある。

表 7：子世代の学歴

		初等	中等 (実業)	中等 (普通)	高等	不明・ 在学中	計
士族	男	1	2	2	13	4	22
	女	3	1	5	10	4	23
商家	男	3	3	2	35	4	47
	女	3	0	2	16	3	24
農家	男	7	21	12	29	5	74
	女	4	38	31	12	6	91

(注 1) 中等 (実業)：旧制実業学校，職業訓練所等，新制高校職業科
 中学 (普通)：旧制中学，高女，師範，専門学校，新制高校普通科

まず表 5 の「父親」世代の学歴では，商家・農家で「初等」学歴が圧倒的多数を占めているのに対して，旧士族では「中等」ないし「高等」学歴がすでに多数を占めていることが目をひく。表 6 の「本人」世代の学歴でもその格差は持続しているが，その中で，商家の学歴が(とりわけ後

だけに限定した数値である。また留意しておかねばならないのは，本人世代で約 30 年の年齢幅があることである。したがって本人世代が年代的には父親世代あるいは子世代に重なり合う場合もあり，数値は厳密に世代差を表しているわけではない。これらのグラフは，あくまでも 3 つのグループの学歴水準が時代的にどのように変化してきたのかを，大づかみにとらえる目的で提示したものである。

2 つのグラフは，3 つの社会集団に学歴主義が浸透していったさまが如実にあらわされている。旧士族にとっては，すでに父親世代から，時代的に言うなら明治中期から，中等以上の学校教育は自明視されていたと思われる。商家層では，本人世代になって，中等教育・高等教育はいずれにおいても旧士族とほぼ肩をならべるまでになっている。ここに，大正期から昭和初期にかけての篠山の商家を取り巻く社会環境の変化のあとを読み取ることができよう。農家層は，他の 2 つのグループのあとを追うように，学歴主義化の道をたどる。その歩みは緩慢であるが，

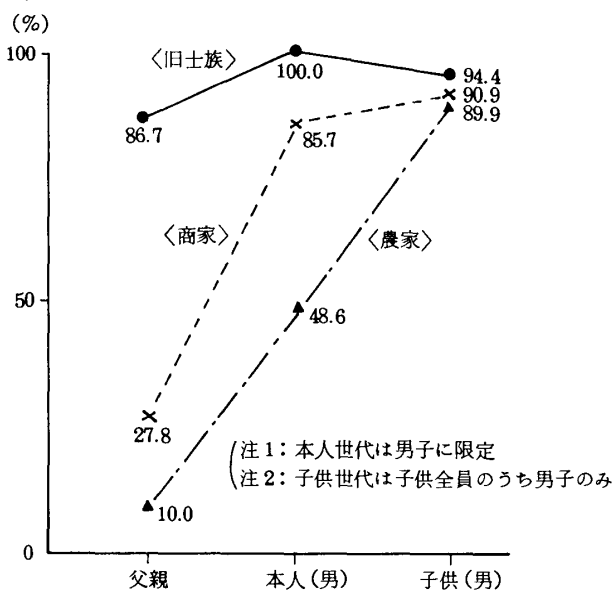


図 1 中等教育以上進学率

期において)高まってきていることがうかがわれる。表 7 の「子」世代になると，ようやく農家でも，その学歴が「中等」以上に離陸する。このように，大まかに言って，篠山の地において中等以上の学歴は，旧士族→商家→農家の順に広まっていったと言うことができよう。

その変化をより視覚的に把握するために作成したのが，図 1 および図 2 である。図 1 は三世代の「中等教育以上」の進学率を，図 2 は同じく三世代の「高等教育」進学率を，3 つのグループ別にグラフ化したものである。なお，図中の本人世代は男性だけに，子世代も子どものうち男子

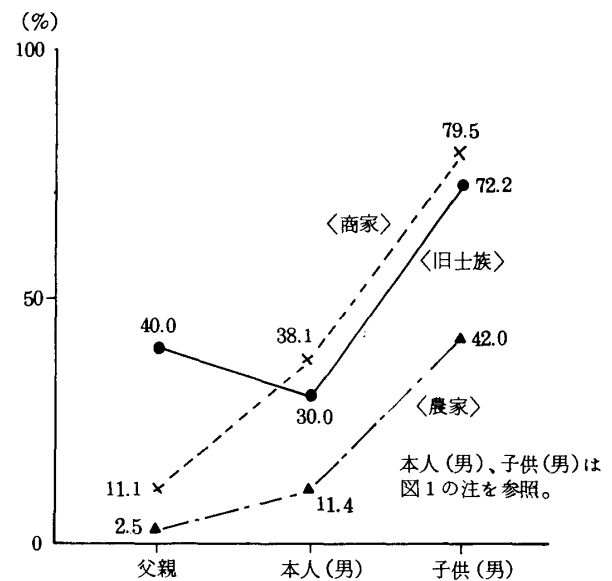


図 2 高等教育進学率

子世代になって，時代的には戦前期から戦後にかけての時期に，彼らの間にも中等教育が普遍化していく。

何が，人々をこのように学校へ，学歴へと駆り立てたのだろうか。どの時点で，どのような要因が，篠山地方における学歴主義の汎化のプロセスに関与したのか。学歴主義の浸透のあり方は，当然 3 つの社会集団で異なったものであったであろう。以下では，各グループごとに，対象となった人々の「ことば」を素材に，そのプロセスの再構成を試みることにしたい。

(志水宏吉)

Ⅲ. 旧士族の生活世界と学歴

1. 課題

本章では、3つの社会集団のなかで最も学歴取得に熱心であった旧士族について検討する。士族と学校教育との関わりについては、既に多くの研究がなされているが、そこでの知見はおおむね次のようにまとめることができる。

まず、士族は平民に先駆けて学校を利用し、官僚・教員・軍人等になることが多かったという事実が明らかにされている。明治期中・高等教育機関在学者に占める士族の占有率が平民と比較して著しく高いこと¹⁾、また輩出率をとっても士族の優位性が維持されていること²⁾などの知見がそれである。さらに、士族の多くが維新以降に新たに出現した学歴を必要とする近代的組織（官庁・学校・軍隊）の俸給生活者（官僚・教員・軍人）になったことも明らかにされている³⁾。

士族がこのように積極的に学校を利用し、組織の被雇用者となったのかについては、大きくわけて2つの説明がなされている。その1は、経済的困窮が、学校利用を促進させたとするものである。維新後、士族は世襲の禄と身分を失い、かつ継承すべき家業も持たず、生活の糧を得るために新たに出現した組織の被雇用者となる外はなかった。この職業は生計を可能にただけでなく、近代以前の身分制社会のもとにおけると同様な高い社会的威信を保つことを可能にすることにより、彼らの欲求を満足させるものであった。それは学歴により秩序づけられた世界であり、参入に、より高い学歴を持つことが要求されたために、士族が積極的に学校を利用することになったというものである。こうした、学校利用の「手段」的側面に着目した説明図式は、多くの研究がとるところであり、立身出世主義をめぐる諸研究も同様の視点にたっている⁴⁾。

その2は、文化的親和性が学校利用への動機づけとして作用したとするものである。士族は維新以前から、一定年齢まで藩校等で教育を受けることを事実上義務づけられており、教育を重視する価値観をその身分文化の一部として継承してきた。制度の変革にも関わらず、彼らは学校や教育に対するこうした価値観を持続し、積極的に学校利用にむかっただけである。これは学校利用の「目的」的側面に着目したもののだが、多くの場合、手段的側面と並記されるにとどまり⁵⁾、両者の関係に立ち入った分析をしていない。

両者の関連を、数量データに基づいて分析したものとしては、広田の研究がある⁶⁾。彼は、旧篠山藩士族を対象に明治中期の学校利用と彼らの旧身分内での地位との関連を問題にし、学校利用の意味の多様性に検討を加えた。そ

こでは伝統的な学校観・教育観と、新に創出された近代学校教育との文化的親和性が明らかにされているが、士族に特有の学校観・教育観が世代間でどのように継承され、それが士族の学校利用の優位性とどう関わっていくのかについてはふれていない。

家族における文化伝達の観点から士族の教育観を分析したものとして、小林の研究がある⁷⁾。彼は、明治期における没落士族の家庭内の教育の実態を伝記・書簡等を用いて分析し、そこで、「立身興家」という目標に向けて、学問を重視した厳格な教育がおこなわれ、それが学校利用と結び付いていたことを明らかにしている。ただ、われわれが問題にする大正・昭和期における文化伝達の問題には及んでいない。

われわれの研究の重要な特色の一つは、旧藩の解体後も篠山に残留し、あるいは一旦他出した後再び戻って、現在篠山に居住している旧士族を対象に、3世代にわたって彼らの学校との関わりを検討するところにある。

ところで、士族と教育の関連についての諸研究の多くは、士族が1つの社会集団として固有の文化を持ち続け、常に士族意識にもとづいて学校を利用したという、暗黙の前提に立っているように思われる。しかし、士族はあくまでも旧身分を表す名称にすぎず、維新以後彼らは様々な職業集団や社会集団に転身していった。明治初期はともかく、それ以降の時期においても彼らがどこまで士族意識に裏付けられて学校を利用したのか、いつ士族意識が、他の階層意識や集団意識にとって代わられたのか、世代間での士族意識の継承の問題を考える必要がある。士族と学校の関わりだけでなく、旧身分意識がいつまで存続したのかを探ることを、われわれのもう1つの問題意識としたい。

2. 分析

分析に先立って、旧士族の1人のライフヒストリーを簡単にたどってみよう。

〈ライフヒストリー1〉

T.Mさん（明治34年生 旧士族の長男、銀行員）

Mさんは男2人女3人兄弟の長男として、明治34年篠山に生まれた。母が旧藩士のMo家の長女、父は同じく旧藩士のMa家からの養子である。Mo家は100石取りの士土の家柄で明治16年当時の生活程度は中程度であった⁸⁾。父は鳳鳴義塾から、御影師範へ進学し篠山で小学校教員^①になり、最後は校長で定年を迎えた。本人の子供の頃、「父も母も礼儀作法や言葉遣いにうるさく、躰が大変厳しかった。」^②そうである。

小学校の頃の夢は、「親戚の東大教授に憧れていた。自

分は東京高商に行って外交官になって活躍したい」③と
思っていた。小学校の同級生70～80人中、4～5人しか鳳
鳴中学に進学しなかったが、「中学へ行くのは当たり前だ
と思って」④進学した。

中学卒業後東京で受験勉強に励んでいる時に父が亡く
なり、後を追うようにして母も亡くなった。長男として弟
や妹の面倒を見なければならなくなり、進学を断念して篠
山に戻り⑥、銀行の頭取りをしていた知り合いに勧めら
れ、その銀行に就職⑤した。

しかし、「銀行員の薄給ではとても弟や妹の学資を出し
きれず、残っていた家の資産を処分しながら弟妹を学校へ
やった。⑦」弟妹は全員中等教育機関を卒業している。

弟妹の学歴は、長女：篠山高等女学校、次女：篠山高等
女学校、次男：鳳鳴中学校、三女：篠山高等女学校であ
る。

24才のとき、旧藩士H家より妻を迎えた。妻は篠山高女
一金城女子専門学校の学歴を持っている。子供を育てる頃
は「サラリーマンで必ずしも豊とはいえなかった」が、3
人の子供は全員高等教育まで進学させた。⑧

子供の学歴は、長女：篠山高等女学校一園田学園女子短
期大学、次女：篠山高等女学校一日本女子大学、長男：鳳
鳴中学校一海軍兵学校一神戸大学医学部である。

昭和5年生まれの子は医学部卒業後研究室に残り、そ
の後神戸で病院勤務をしていたが「両親がここで開業す
ることを強く希望したので戻ってきた。」⑨子供世代は殆ど
が篠山から流出しているなかで、篠山へ戻ってきた少数派
である。

これは、篠山における士族の代表的な事例の一つであ
る。以下、事例に付した下線①から⑨に沿って、士族の生
活世界と学歴との問題を考察することにしよう。

(1) 父親世代の職業

すでに父親世代は、大半が近代的組織の俸給生活者にな
っており、学歴の支配する世界で職業生活を送っている。
その中では教員が最も多く、地域に残留する俸給生活
者の職業としては教員が最も一般的、というより学校以外
にはほとんど近代的組織が存在しなかったことを教えて
いる。

表8：父親世代の職業

教員（初等教育）	5（人）
教員（中等教育以上）	4
銀行員	3
軍人	3

鉄道員	1
自営業	2
計	18

注：聞き取り対象者が士族に嫁した女性の場合は夫
の父親の職業

(2) 本人世代の子供の頃の躰と教育

旧士族の父親世代はおしなべて子供の躰に厳しく、教育
熱心な態度をとった。すでに父親世代は職業的に轉身し、
士族は旧身分集団を表す名称にすぎなくなっているにも
関わらず、士族意識が強固に残っている。士族としての誇
りは、本人世代を躰る際に、あるいは、勉強させるための
動機づけの手段として持ち出されている。

<事例3-1> 本人世代の子供の頃の躰と教育

「両親とも士族であることに誇りをもっており、躰に厳
しく、礼儀や言葉づかいにうるさかった」(明治34生、男)

「父は士族のプライドを持っていて、私をなんとか高女
にいたがっており勉強にうるさかった」(大正9生、女)

「今の親のように『勉強せい』というのではなく、書物
を読むことの大切さとかを知らず知らずのうちに教えら
れたような気がしますね」(大正12生、男)

「おばあと母は、『侍の子やのに……』とよく小言を言っ
ていた」(大正12生、男)

「士族は気位が高く、『貧乏でもさもしいことはするな、
自分の身を汚すようなことはするな』とよくいわれた。お
金ではなく、恥とか人格とか家名とか精神面を重じてい
た。」(大正14生、女)

「『どん百姓に負けるな』と親からよく言われ、自分でも
そう思っているいろいろな面で努力した」(大正15生、女)

(3) 本人世代の職業的展望

俸給生活者となった旧士族の子弟にとって、学歴取得
は、父親世代の社会的地位を維持するためにも不可欠の条
件であった。本人世代が子供の頃、「大きくなったら何に
なりたかと思っていたか」を聞くと、官僚、教員、軍人等
に限られており、職業上の展望が俸給生活者化しているこ
とがわかる。

<事例3-2> 子供の頃の夢

「(親が中学校の教師なので)自分も教師になろうと思っ
ていた」(明治40、男)

「鳳鳴から一高・帝大へ行って新聞記者になりたかった」
(大正12生、男)

「大きくなったら軍人になりたかった。陸士を受験した

が眼が悪くてだめで諦めた」(大正15生, 男)

(4) 中等教育への進学動機

しかし、本人世代はそうした夢の実現のために、あるいは、「士族だから」という意識に裏付けられて、中等教育に進学したわけではない。彼らの家族にとっては進学することは自明のことだったからである。確かに父親世代は勉強することに高い価値を置いていた。しかし、それは学校への進学が直接の目的ではなかった。重視され、強調されたのは真面目に勉強する態度の養成であり、従って、その延長上に当然のこととして、中等教育への進学があったのである。

〈事例3-3〉 進学動機

「田舎では金があっても(中学へ)いかさなかつたりして、近所で行く人がいなかったけど、自分は兄弟もそう(進学)だったので中学はいくものだと思っていた」(大正6生, 男)

「父親も鳳鳴を卒業していたので、中学校へ進学するのは当然だと思っていました。まるで義務教育みたいなもんです。ただ恥をいうようですけどね。私、中学の月謝をね、持っていくのを延ばして、ちょっと待てといわれたこと何回かあります、お袋からね」(大正6生, 男)

本人世代で高等教育へ進学した者は約3割であるが、(図2)、進学を希望していた者は8割にもものぼる。進学を果たせなかった理由は、全て経済的な貧困であったことに尽きる。中等教育のみならず高等教育への進学も自明視されていたわけであり、それを阻んでいたのは経済的条件だけであった。

(5) 本人世代の職業

本人世代の職業は、教員・官公吏が多いという点では父親世代と共通している。ただし、18人中13人が一度は篠山を離れて初職を求めている。俸給生活者になる以外にはほとんど道がなく、しかも高等教育まで受けた者もいる。学歴にみあう職を得るには、篠山は余りに狭すぎたのである。

表9：本人世代の初職

教員(初等教育)	3人
教員(中等教育)	3
銀行・会社員	5(篠山4)
官公吏	4
医師	1

船員	1
工芸職人	1(篠山1)
計	18

注：聞き取り対象者が士族に嫁した女性の場合は夫の職業

(6) 戦争による還流例

しかし、彼らがなぜ再び地域に戻り現在篠山に居住しているのか、その理由としては戦争の持つ意味が大きい。流出した13人中9人が戦争を契機に篠山へ戻っている。さらに、ライフヒストリーの例にあるように、長男であるため「イエ」を継承しなければならないという強制が働いている場合もある。

表10：戦争による還流例

明治39生(夫)	: 国鉄→疎開→終戦後死亡
明治40生	: 教員(神戸)→疎開→教員
明治43生(夫)	: 会社員(三重)→疎開→教員
大正6生	: 満鉄(満州)→シベリア抑留→復員→職業安定所
大正9生	: 会社員→終戦→闇屋(神戸)→帰郷→教員
大正9生(夫)	: 華北交通(満州)→終戦→帰郷→尼崎製鋼→酒屋勤務
大正14生	: 学徒動員(満州)→強制送還→事務員→教員
大正15生	: 学生(大阪)→徴兵→終戦→帰郷→会社員
昭和9生	: 小学生(東京)→疎開→新制中学→工芸職人

注：聞き取り対象者が士族に嫁した女性の場合は夫の履歴

〈事例3-4〉 長男であることの拘束

「長男は家を守り、次三男は外へ出るという考え方だった」(明治40生, 男)

「自分(長男)はこの土地と家を守るために(篠山に)残った」(大正6生, 男)

「古い家だから代々継いでいきたいという気持ちがあった(長男が)戻ってきた」(昭和5生, 女)

「長男だから地元におらんといかんと考えた」(昭和9生, 男)

(7) 性別・出生順位

ところで、旧士族において、出生順位や性別と学歴取得

とは、どのような関連を持つのであろうか。日常生活において長男とそれ以外、男子と女子を区別することは頻繁にみられ、また家督を継ぐのは長男が一般的である。しかし、学歴取得については、子供の出生順位や性別によって意図的に差異がつけられることはなかった。それは、士族の教育熱心のためというより、俸給生活者として世代的な再生産の継続には、出生順位に関わりなく学歴を取得することが必要だったためと思われる。

〈事例 3-5〉 出生順位

「なんでも長男一点張り。男だから女だからというのもあった。」(大正 9 生, 男)

「長男は特別。『兄だから辛抱しろ』と言い、弟たちには『兄にこんな事をしてはいけない』と言い分けていた。」(大正 14 生, 男)

「長男だから進学とかそんなことはなかった」(大正 14 生, 男)

・本人(夫)とその兄弟の間で学歴差のみられるものは 13 名中(不明を除く) 3 名

・本人(夫)とその姉妹の間で学歴差のみられるものは 11 名中(不明を除く) 3 名

(8) 子供世代の教育

子供世代になると、激しくなる一方の学歴取得競争への参加は当然のこととなる。本人世代が子供世代の教育に熱心であるのはいうまでもないが、ただ一世代前の父親世代が本人世代にしたように、勉強の動機づけの手段として士族意識が持ち出されることは、もはやない。士族意識は本人世代には強く内面化されておらず、旧士族に独自の、勉強そのものを重視する価値観は、すでに殆どみられなくなっている。それにかわって、学歴取得そのものを目的に、勉強を強制する傾向が強くなる。

〈事例 3-6〉 士族意識の消滅

「父にはそんな感じ(士族意識)もありましたが、私にとっては何の関係ありません」(昭和 9 生, 男)

「子供の頃大人からやっかみ半分にいわれるのが嫌だった。かえって士族であることに反発したりした。今はもう自分とは関係のないことだ」(昭和 5 生, 男)

〈事例 3-7〉 子供世代の教育

「せめて名のつく高校へ行かせるたくて『勉強しいしい』といった。」(大正 9 生, 女)

「息子が高校生のとき生徒手帳に『勉強第一』と書いて

あるのを見て嬉しかった。子供が勉強しているのを見るのはたまらない気持ちになる。」(昭和 5 生, 女)

「学校は本人が行きたければやる、だが学歴がないとダメな世の中になってきた」(昭和 9 生, 男)

(9) 子供世代の流出

子供世代は学歴取得競争の結果、当然のように篠山から流出していく。本人世代でさえ初職を篠山以外の地域で求めることが多かったのだから、子供世代にとって流出は必然である。本人世代はそれに対し、葛藤を感じてはいないようである。継承すべき家業も、また士族の家柄への誇りも今は消滅しているからだろう。そうしたなかで、5 人が篠山へ戻ってきている。

表 11: 子ども世代で篠山へ戻った例

明治 34 生の人 の 長男……開業医(←勤務医)
大正 9 生の人 の 長男……会社員(←東京の会社員)
〃 長女……無職(←東京の会社員)
大正 12 生の人 の 女子……?
大正 14 生の人 の 長男……教員(←銀行員)

3. まとめ

旧士族の多くは、新たな生活手段を求めて、近代的組織の俸給生活者へと社会的な転化を遂げた。それは官庁・学校から企業まで、学歴によって秩序づけられた世界であり、学歴の有無が職業上の地位に大きく影響する世界であった。他の社会集団に先駆けて学校を利用し、学歴の支配する世界に入り、その世界で生活するようになったとき、旧士族の生活世界のなかに、学歴が有機的に組み込まれたのである。

父親世代からそうした世界で生きてきた、家業を持たない社会集団としての旧士族が、子供の教育に熱心で、より高い学歴の取得を望んだのは当然であった。それは旧士族の価値観である以上に、俸給生活者の価値観といってよい。父親世代は、俸給生活者となっても士族としての旧身分を強く意識し、それに誇りをもって本人世代の教育を行った。士族たるものまず勉強が大切であり、勉強は躰の一環であるという考え方が支配的であった。

しかし、そういう躰を受けた本人世代には、すでに士族意識は内面化されていない。学校へ行くことは、その時代の少数派であっても、そのことをあらためて意識する必要もない当然のことであった。そして今、子供世代の生きる時代は、誰もが学歴なしには生きられないと考え始め、競争への参加者が多くなった時代である。継承すべき家業のない旧士族は、それだけ、競争の勝者となるべく努力しな

なければならない。また、もはや士族意識が勉強の動機づけの手段たりえないとすれば、それだけ、子供世代に学歴取得を目的とした勉強を要求せねばならない。

旧士族は、どの世代も高い学歴を取得している。しかし、学歴取得そのものを目的として強調する必要を生じたのは、子供世代になってからであり、それは士族意識の消滅と強く関わっているのである。(吉田 文)

注

- 1) 例えば、菊池城司「近代日本における中等教育機会」『教育社会学研究』第22集 1967、天野郁夫「近代日本における高等教育と社会移動」『教育社会学研究』第24集 1969等
- 2) 浜名篤「明治期の士族の学校教育機会に関する研究」『教育社会学研究』第39集 1984
- 3) 例えば、青沼吉松『日本の経営層』日本経済新聞社 1965、萬成博「ビジネス・エリート」中央公論社 1965、高根正昭『日本の政治エリート』中央公論社 1976、麻生誠「エリート形成と教育」福村出版 1978等
- 4) 竹内洋『日本人の出世観』学文社 1978
- 5) 例えば、天野郁夫『教育と選抜』第一法規 1982
- 6) 広田照幸「近代日本における社会移動と教育」『教育学研究』第54巻 1987
- 7) 小林輝行『近代日本の家庭と教育』杉山書店 1982
- 8) 『篠山士族人名録』1883

IV. 商家の生活世界と学歴

1. 課題

商人層が一つの社会層として台頭するのは元禄期からとされるが、その頃から、子弟の教育は商家の維持・存続にとって重要であると考えられ始めた。元禄7年の堀流水軒『商売往来』には「抑、生_レ商売之家_一輩、從_レ幼稚之時_一、先手跡算術之執業、可_レ為_レ肝要_一者也」と記されている¹⁾。ただそれはまだ、読み・書き・算盤の基礎学力の範囲内での、自己学習の勧めにすぎなかった。明治維新後、近代学校制度が導入された時も、それに対する商人層の抵抗は比較的少なく、小学校への入学にはむしろ積極的な態度がとられた。例えば明治13年の赤沢政吉『新撰画入商売往来』は「先、幼稚の時より小学校に入り、……就中、読書・算術・習字・記簿法等、怠慢なく、勉強習熟すること専要也」としている²⁾。小学校での教育は、江戸期にすでに定着していた学習の延長線で捉えられており、そのかぎりで重要視されていた。

しかし同時に、それ以上の学校教育は不要と考えられた。なぜなら、商売上の知識・技術や商人としての心得などは、学校教育では代替できないもの、直接仕事を通じて身につけるべきものと考えられていたのである³⁾。こうした教育観の基礎にあったのは江戸期からの丁稚奉公制度

であり、それは維新後衰退の一途をたどったとはいえ、昭和初期まで存続した⁴⁾。この制度のもとで、商人の子弟や被雇人は、義務教育以上の教育を受けなくても、充分に一人前になれたのであり、すぐれた商人となるためには、長期間の学校教育はむしろ妨げになると考えられていた。

そのことは、雇用主が新規採用の使用人にどの程度の学歴を期待していたかをみてもわかる。大正15年の京都市の調査によると、商業徒弟の場合には尋常小学校卒業程度を望む者が70%、高等小学校卒業程度が28%、工業徒弟の場合は尋常小学校程度が78%、高等小学校卒業程度が17%であり、大半が義務教育さえ修了していればよいと考えていたのである。徒弟の学歴は実際にはそれよりやや高く、商業徒弟の場合、尋常小学校卒業程度(中退も含む、以下同様)が27%、高等小学校卒業程度が58%、工業徒弟の場合は尋常小学校卒業程度が42%、高等小学校卒業程度が35%であったが、大半が初等教育程度であることにはかわりはない⁵⁾。商家の生活世界は、大正期においても中等教育以上の学歴世界とは関わりなく存立していたといえるだろう。ここで対象とする篠山のような地方都市の小売商人となればなおさらであったといえる。

しかし、先にあげた図1にみるように、その篠山でも父親世代から子供世代にかけて、年代でいえば大正期を境にして、商家の子弟が中等学校に進学し始める。学歴主義が商家の生活世界にどのように浸透していったのか、これは旧士族や農家と比較してどのような特徴を持っているのか、これを明らかにすることが本章の課題である。この問題を考えるにあたって、鍵となるのは「家業継承」の問題である。家の再生産について、子弟に教育を受けさせ、学歴を与える以外に「戦略」のなかった旧士族と異なり、商家は継承すべき家業を持っており、それは学校教育と対立的な関係にあった。そこにどのような葛藤が存在し、これがなぜ学歴主義の勝利に終わるのか。以下、その変化の過程を跡づけることにしよう。

2. 分析

まず、調査対象者の特性についてまとめておく。表12は対象表のプロフィールを示したもののだが、性別は25名中、男性21名、女性4名、また業種は種々であるがすべて小売商という点は共通している。商売替えをしている場合もあるが、すべての家が明治初期あるいはそれ以前に創業しており、この地域でも古い商家に属する。

表12：商家・調査対象者のプロフィール

対象者	出生年	性別	家業	最終学歴
1. Aさん	明治35年	男	提灯	高等小学校
2. Bさん	41年	女	薬	高等女学校
3. Cさん	41年	女	畳	高等小学校
4. Dさん	42年	男	種苗	鳳鳴中学
5. Eさん	大正1年	男	醤油	鳳鳴中学
6. Tさん	2年	男	呉服	鳳鳴中学
7. Fさん	3年	男	金物	農学校
8. Gさん	3年	男	旅館	同志社大学
9. Hさん	3年	男	文房具	慶応大学
10. Iさん	7年	男	酒	広島高等商業学校
11. Jさん	8年	男	薬	富山薬学専門学校
12. Kさん	8年	男	呉服	工業学校
13. Lさん	8年	男	食堂	高等小学校
14. Mさん	9年	女	薬	高等小学校
15. Nさん	14年	男	呉服	関西大学
16. Pさん	15年	男	魚	鳳鳴中学
17. Qさん	15年	男	寿司	鳳鳴中学
18. Rさん	昭和3年	男	米穀	高等小学校
19. Sさん	3年	男	和菓子	同志社外事専門学校
20. Oさん	4年	男	洋品	神戸高等商業学校
21. Uさん	5年	男	本	鳳鳴中学
22. Vさん	7年	男	石材	鳳鳴中学
23. Wさん	7年	男	古美術	鳳鳴中学
24. Xさん	8年	男	時計	京都薬科大学
25. Yさん	16年	男	陶器	鳳鳴高校

商家と学校との関係の歴史的变化を捉えるために、ここでも対象者のなかの2人のライフヒストリーを手がかりにすることにしよう。

〈ライフヒストリー2〉

T.Tさん (大正2年生, 呉服商)

Tさんは、大正2年呉服屋の長男として篠山町に生まれた。兄弟は7人(男2人, 女5人)、姉が2人いた。戦前の篠山は豊かで活気があり、多い時には多紀郡内に30軒以上の呉服屋があったという。店は祖父の先代から続いており、父親の代に暖簾分けをし、今の場所に店を構えた。父親は尋常小学校卒、母親は三田の農家出身で高等小学校卒である。

Tさんは、一方では長男かつ跡継ぎとして大切にされたが、他方では店の手伝いをよくさせられ、「おつかい用に、当時では珍しい子ども用の自転車を買ってもらい、道行く姿が町内で評判になった。」また、使用人と「同じ物を食べ、入浴も一緒にし」、特別扱いされることはなかった。

尋常小学校卒業後、鳳鳴中学に進学したが、2年で中退する約束であった。①というのは、中学を卒業するまで学校にいと、頭が高くなって商売人としてやってゆけなくなる③、という父親の考えがあったからである。高等小学校か中学2年かと言われ、選んだのが中学であった。同じ商家の子弟で中学を中退していった者もいるが、概して少なく、卒業まで在学した者は他所に行ってしまうことが多かった。なお5人の姉妹は全員、高等女学校を卒業した。末子の次男は鳳鳴中学校卒業後、高岡高等商業学校に合格したが、東京の大学を再受験しようと勉強中に病気で死亡した。

中退後10年ぐらひは、跡継ぎとしての修業で「自転車に反物を積んで、多紀郡中を毎日行商してまわった。」②それは、店にいただけで外に売り歩かなければ、きちんとした商売はできなかつたからである。正式に跡を継いだのは、終戦で兵隊から帰ってのちである。父親が61才、Tさんが34、5才の頃であった。結婚は25才(昭和13年)、お見合いである。妻の実家もまた、兵庫県北部の豊岡で呉服商を営んでおり、妻は、豊岡高等女学校を卒業している。

子供は、戦争をはさんで4人生まれ、全員、鳳鳴高校を卒業し大学に進学した。長男は大阪市立大学を卒業後、家業を継いだ。最近病気で亡くなった。次男は神戸大学、三男は甲南大学を卒業し、阪神間で就職している。長女は甲南女子大学を卒業した。

子供の家業継承にあたっては、無理強いはしなかつた。「商売にしても何にしても、自分から進んでしようと思つてでないだめ」④だからである。しかし、Tさんの母親(子供からみて祖母)が健在で長男をかわいがり跡を継ぐことを積極的に勧めたということはある。その長男の死亡後、次、三男に戻ってこさせる気持ちは全くない。未成年だが孫が3人(いずれも男子)いるし、まだ自分のからだも動くからである。孫が跡を継いでくれなくても仕方ないとも思っている。「時代時代で考えて」ゆかねばならないのである。

〈ライフヒストリー3〉

A.Oさん (昭和4年生, 洋品店経営)

Oさんは昭和4年、雑貨屋の長男として篠山町に生まれた。兄弟は弟が1人、妹が4人の計6人である。店は、明治初期からランプを中心に様々な商品を扱い、戦前期には丁稚を何人も使っていたという。また女中さんも、Oさんが小さい子供の頃までいた。Oさんの父親は篠山高等小学校を卒業しており、母親は近郷の比較的裕福な農家の出身で、篠山高等女学校を出ている。

Oさんは、生まれた時から跡を継ぐことが決まってお

り、「他に夢はなかった。」「戦争や何やかやでややこしい」時代で、兄弟はみな「ごちゃごちゃ」で育てられ、特別な躰を受けたことはないが、学校から帰ったら配達・注文取りに行くのが日課であった。

そして、親から言われたわけでもなく「そこに行くのが当たり前」のように、鳳鳴中学に入った。①当時の町内では、高等小学校に1年行っても（即ち一浪しても）中学に行く者が多かった。中学卒業後、一番近くにあつて、商家の跡取りのための有名校ということで神戸高等商業学校に進学した。②この時丁稚奉公して一人前になった父親は「商売するのに学校など行く必要ない」と反対した。進学できたのは、学校に行っていれば兵隊にとられないからと説得してくれた母親のおかげだった。高等教育を受けさせることについてOさんの母親は、学校の先生相手に商売するとき「先生と対等に話ができますのでね、ひけをとらなくていいですからね」③と、その効用を積極的に評価している。なお耳に障害があるため、正規の学校を経ずにデザイナーになった弟を除き、妹4人は全員鳳鳴高校を卒業しそれぞれ高等教育機関へ進んだ。

父親が結核を患ったため、Oさんは学業半ばで篠山に戻ってくる。その後、30才の時に見合結婚した妻と力を合わせて商売を拡張し、現在は篠山町で最大の洋品店を営むに至っている。妻は隣の氷上郡の時計店の娘で、柏原高等女学校を卒業している。

子供は、昭和30年代に男の子ばかり3人できた。長男、次男は学業優秀であり、2人とも東京大学に進学し、長男は設計会社、次男は銀行に勤めている。奥さんは、「商売に忙しくて子供は女中さんまかせだったけど、学校の勉強で頑張ってもらいたいと思っていた」と言う。跡継ぎの期待は現在大阪産業大学に在学している三男に向けられている。「こいつをつかまえておかんと」④ということで「あまり勉強させなかった」そうである。かなり手広くやっている商売を、自分の代で途絶えさせるのは惜しい。このままゆけば、恐らく三男は期待どおり跡を継いでくれるであろう。

大正2年生のTさんと昭和4年生のOさんとの間には「学校との関わり方」に大きな差異がみられる。以下では、ライフストーリーに付した下線に沿って①「本人の進路選択」、②「家業継承の経緯」、③「商売と教育との関係」、④「子どもへの家業継承期待」などのテーマについて、この2つのケースのずれをみることにより、商家にとっての学校教育と学歴の意味の変化を跡づけてみよう。

(1) 本人の進路選択

Tさんは大正2年呉服屋の長男として生まれ、鳳鳴中学を2年で中退し家業を継いだ。Tさんの事例は、商家にとって学校教育や学歴が不要とみなされていた時代から、そうでない時代への境目の事例として、極めて象徴的な位置を占めている。下線部①にあるように、Tさんは「2年で中退する」という父親との約束で、鳳鳴中学へ進学する。Tさんに先立つ時代には、中学への進学は一般的なことはなかった。事例4-1をみると例えば明治35年生まれのアさんは「同級生はみんな丁稚に行った」と述べている。

〈事例4-1〉 明治生まれ世代の進路通扱

「自分のクラスからは中学へは行かなかった。同級生はみな丁稚へ行った。」(Aさん、M35年生)

「校長が自宅まで来て、高女に行くのをすすめてくれた。通学途中で痴漢が出るという話があり、いやなので大阪の和裁の学校に行った。上級の学校へ行く人は少なく、みな家の手伝いをしてお嫁に行った。」(Cさん、M41年生)

「小学校5年で、200人中3人が鳳鳴中学に進んだ。自分はその中の一人だった。先生にすすめられた。推薦で入ったようなものだった。」(Dさん、M42年生)

丁稚奉公に行くなど学校を経由しない進路選択が、特に次・三男の場合支配的だったと思われる。またTさんは「長男は篠山から外へ出てしまうため、上の学校を卒業することはよしとされなかった」とも語っている。明治期から大正中中期にかけて篠山の商家の人々にとって、学校教育を受け学歴を取得することがその後の人生に持つ意味は、まだ可視的ではなかったのである。それは親世代の学歴が、旧士族と比較してかなり低い水準にとどまっていることからわかる。しかしTさんから後の世代になると、事情ははっきり異なり、事例4-2のHさんのように「当たり前のように進学した」というケースが登場する。

〈事例4-2〉 大正生まれ世代の進路選択

「自分にはっきりした意識はなかったが、まわりに『鳳鳴でなければ』という雰囲気があり、自分自身も鳳鳴に行くことを積極的に肯定していた。」(Gさん、T3年生)

「余り考えることもなく、当たり前のように進学した。」(Hさん、T3年生)

「店を継ぐ人とか、百姓を継ぐ人とかは中学へは行かなかったが、自分は中学へ行くのが当たり前と思っていた。」(Jさん、T8年生)

ここで注意したいのは、家業の薬屋を継ぐために、薬専に進学する必要があったJさんのような事例を除くと、中学校への進学が商売上の要請と直接関係がなかったということである。Tさんにしたところで、中学校卒業は商売の妨げになると考えていた当の父親が、2年間とはいえTさんを中学校へ行かせている。

ここに、学校教育及び学歴の商家にとっての独自の意味がかくされているのではないだろうか。旧士族や後にみる農家の場合、中等学校への進学は、主として職を得るための手段と考えられていた。商家の場合にも、次・三男についてはそういう意味合いが強かったことは確かである。しかし大正期以降に生まれた家業継承者が、大部分中等教育を受けているという事実は、職を得るための手段ということからだけでは説明がつかない。高い進学率の背景には、大正期から戦前期にかけて「郡内で呉服屋が30もあった」という篠山町の経済的繁栄、歩いて通学できる範囲内に、しかも地域性が強い入学競争が余り厳しくない鳳鳴中学があったという、地理的な利便性があったことが考えられる。しかし、それだけではない。そこには経済的合理性だけでは割り切れない学歴の価値が、人々を学校へ向かわせる動因となった可能性が示唆されている。つまり学校教育を受け、学歴を手に入れることは、地域社会のなかでの地位の高さを象徴する役割を果たす、ということに商家の人々が気づいたと考えられるのである。

この点については、Tさんの言葉が示唆に富む(事例4-3)。

〈事例4-3〉 学校の効用についての言葉

「長男は、外に出てしまうため、上の学校を卒業するのはよくない。」

「中学を卒業すると、頭が高くなって、商売人としてやっていけなくなる。」

「(商売にいる知識と学校で習う知識は、)全然まあ違うね。何や間に合わへんね。そりゃあ付き合いにおいて(役立つ)言うんで、商売そのものにはいらへんわね。」

Tさんの家は、町内で由緒のある呉服商であり、いわば商家らしい商家である。そのTさんの眼には学校教育は商売に対立するものと映っている。しかし、Tさんも、学校へ行くことが「その後の付き合いに役立つ」と言っていることが注目される。反学校的な考え方をしているTさんでも、学校に行くことに一定の効用を認めていたわけである。さらに事例4-4のような意見もある。

〈事例4-4〉 低学歴層の教育観

「教育を受けると人間が変わってくる。教養がつく。話をしとるとわかる。職人は生活に困っていないが、話をすると視野が狭い。」(Aさん、高小卒)

「計算や字のことなど、もう少し勉強すればよかったと思う。」(Bさん、高小卒)

ここで注目したいのは、高小卒のAさんの「教育を受けると人間が変わってくる。話をしとるとわかる。」という言葉である。こうした教育観は、学歴の低い人にしばしばみられるものである。学校教育は、彼らにとってそれを受けた人々に、自分たちとは違った何かを与える、魔術的な力を有しているように映っていたのである。

次にOさんの事例について考えてみよう。Tさんが過渡期に生きた人であるとするならば、Oさんは、すでに学歴主義が篠山のような地方都市の住民の間にも浸透し、中等学校への進学率が著しく高まった時期に生まれた人といえるであろう。Oさんにとって、中等学校以上の学校に進学することは、下線部①にあるようにごく当たり前のことであった。戦時色が濃くなりはじめた頃のことであるが、事例4-5に挙げたように、同世代の商家の子弟たちもほぼ例外なく鳳鳴中学に進学している。

〈事例4-5〉 昭和生まれの世代の進路選択

「まあ普通のできばえの者であれば、中学校行くのが、あるいは女学校行くのが、当然のような時代でしたよ。」(Sさん、S3年生)

「47、8人のクラスから中学へ25、6人行った。経済的なものに加えて、学力が必要だった。兄が行けば弟も行くというかんじだった。」(Vさん、S7年生)

「兄が進学していたので、特に考えずに進学しました。」(Wさん、S7年生)

この時期になると、Tさんの時代とは対照的に、長男以外が跡を継ぐケースが多くなって来る。相続のパタンをまとめたのが表13である。

表13：家業継承のパタン

継承者	古い世代 (~T8年生)	新しい世代 (T9年生~)	計
長男	6 (ADTGHJ)	4 (QSOV)	9
次三男	2 (KL)	6 (NPRUWX)	8
養子	3 (EFI)	0	3
非該当(女性)	3 (BCM)	1 (X)	4
合計	14	11	25

〈次三男相続の例〉

対象者	理由	年齢
Kさん(T 8, 次男)	祖父の跡を継いだ(父と兄は神戸で同業)	30代
Lさん(T 8, 次男)	兄が商売に向かないため	27
Nさん(T 14, 次男)	兄が都会で教師をしていたため	47
Pさん(T 15, 四男)	兄二人が進学していたため	20
Rさん(S 3, 次男)	高小2年の時父が死亡, 兄が進学していた	15
Uさん(S 5, 次男)	兄が早く死に, 卒業後職もなかったから	18
Wさん(S 7, 三男)	兄達が進学し, 家を出たから	25
Yさん(S 16, 五男)	サラリーマン生活に見切りをつけた時, 兄が商売から手を引いたため	36

〈養子相続の例〉

対象者	経緯
Eさん(T 1, 次男)	隣町の出身, 生家は呉服・雑貨商, 鳳鳴中学出身, 復員後30才の時養子に, 二人姉妹の姉と結婚
Fさん(T 3, 次男)	加古川の出身, 生家は地主, 県立農学校を卒業, 復員後27才の時加西出身の奥さんとともに養子に, 遠縁にあたる。
Iさん(T 7, 五男)	鹿児島出身, 生家は地主, 鹿児島中学から広島高工中退, 昭和20年27才の時養子に

ここに示されているように, 次三男が相続した事例は大正後期生まれ以降の世代に限られている。その多くはPさんのように, 「兄が進学したため」という理由で跡を継いでいる。商家にはこの頃すでに出生順位に関わりなく, 誰もが学校へ行く時代が始まりつつあった。長子相続の原則は崩れ, 誰かが跡を継げばよいという時代になっていた。「生まれた時から跡を継ぐことが決まっておき, 他の夢はなかった」というOさんのような事例は, むしろ例外に属する。なお, もう一つの注目すべき点は下線部②にあるようにそのOさんが, 「跡取りのための有名校」ということで神戸高商に進学していることである。高等商業が, 京阪神の富裕な商家の跡継ぎの教育の場とみなされていたと同時に, そうした考え方が, 中等教育を受けることが当たり前となった篠山のような地方の小売商にまで, 受け入れられ始めたことがわかる。親に言われて, 中学校を中退し行商してまわったTさんとは何という違いであろうか。

(3) 商売と教育との関係

商売と教育との関係についての見方も変わってくる。下線部③のように「学校へ行っているとひけをとらない」という見方がでてくる。Oさんにとって, 学校教育は商売をしていく上でなくてはならないものになったのである。事例4-6は学校に行かなかったことのデメリットにふれた言葉である。それが昭和期生れに集中していることが注目される。

〈事例4-6〉 学校へ行かなかったことのデメリット
「学校へ行っていないゆえの苦労はあった。」(Rさん, S3年生)

「主人は学校でんかったから, お客のニーズに答えられんかった。」(Xさん, S8年生)

「就職してから, やっぱり大学に行っておけばよかったと思った。」(Yさん, S16年生)

Rさんの「学校へ行っていないゆえに苦労はあった」という言葉に象徴的に示されているように, 学校教育や学歴はそれを持たないことが商売にとって不利に働く, それゆえに不可欠の実利的なもの・手段的なものとみなされるように変化したのである。わずか一世代ほどの間に, 学歴は商家の日常生活のなかにしっかり根を下ろしてしまったのである。

(4) 子供への家業継承期待

Oさんはまだ子供の家業継承期待について, 下線部④のように三男に対して「こいつをつかまえておかない」という期待を持っている。この言葉には, 篠山の商家の置かれた現状が極めて的確に表現されているように思われる。図3に示されているように, 商家の子供世代の学歴は極めて高く, 高等教育機関への進学率は8割以上に達し, どの家でも跡継ぎをどう確保するかが深刻な問題となっている。「長男でなくてもいい, とにかく誰かが継いでくれるといいのだが」と思う反面, 「しかし, 自分の代で終わっても仕方がない」と遠慮がちにならざるをえないのである。

3. まとめ

これまでの考察を整理してみよう。商家と学校との関わりは, 歴史的に3つの段階を経て今日に至っているように思われる。すなわち, 「跡取りである長男は学校へ行かなかった」→「跡取りである長男も学校へ行くようになった時代」→「皆が学校をめざし, 誰かが跡を継ぐようになった

た時代」。年代的には、大まかに明治・大正・昭和に対応している。そしてTさんの事例は第一の段階から第二の段階へ過渡期を、Oさんの事例は第三の段階をそれぞれ示していると見ることが出来る。表14はいくつかのトピックについて二人の言葉を比較したものであるが、そこには教育ないし学校観、さらには学校体験の著しい相違がみられる。

表14：二人の言葉の比較

	Tさん (昭和初期に青年期)	Oさん (戦争期に青年期)
進学動機	「高小か中学2年か」といわれ鳳鳴中学を選ぶ	「そこに入るのが当たり前のように鳳鳴中学に入学
見習期間	「10年間自転車に反物を積んで郡内を行商してまわった」	「近くにある跡取りのための有名校」ということで神戸高商へ進学
学校観	「中学を卒業すると頭が高くなり、商売人としてやってゆけない」	「先生と対等に話ができる。ひげをとらない」
学歴／親	尋小(父), 高小(母)	高小(父), 高女(母)
本人世代	鳳鳴, 高女4人, 高岡高商	神戸高商, 京都女大2人, 他2人
子供世代	大阪市大, 神戸大, 甲南大	東大2人, 大阪産業大

最大の焦点は、なぜ第一の段階から第二の段階へ移行が起こったのかという問題、言い換えれば、なぜ家業という資産を持った商家の長男までもが、商売に必要な知識や技術の習得と直接かかわりが無いにも関わらず、中等学校へ行くようになったのかという問題である。彼らには、それ程高度の専門的な知識や技術が必要だったとは思われない。それだけでは、彼らが長男を中学校に、さらには専門学校や大学にやるようになったのかを説明できない。可能な説明はいくつか考えられる。経済的な余剰が人々に学校へ行く気を起こさせた。よりよい商売をするため。単に中学校が近くにあったから等。しかし、そのどれもが納得のいく説明とは思われない。最も重要なのは「地位意識、階層意識」とでもいうべきものとの関連である。大正末期・昭和初期は、地方における中以上の階層に属する人々の階層意識が著しく高まった時代であるように思われる。中等教育、さらには高等教育は、そうした彼らの社会的な地位の高さを表示する、主要な文化的な財とみなされたのではないだろうか。そして、いったん受け入れられた学歴の象徴的な側面を重視する価値観は、あつという間に俸給生活者の場合と同様に、その手段的な側面を重視する価値観へと転化していく。いずれにせよ、学歴主義の浸透に頑強に抵抗を示すような独自の文化、あるいは独自の生活様式といったものが、篠山の商家に存在しなかったことは確かな

ように思われる。中・高等教育を受けるようになった商家層は、たちまち学歴取得競争の巨大な波にのまれ、家業の継承そのものが困難な事態に直面するようになったのである。

(吉田 文)

注

- 1) 三好信浩『商売往来の世界』NHK ブックス 1987 p. 48
- 2) 同上, p. 187
- 3) 三好信浩『日本商業教育成立史の研究』風間書房 1985 pp. 463~469
- 4) 入江宏「町人社会の教育—丁稚奉公制度—」梅根悟監修『世界教育史大系 I 日本教育史 I』講談社 1976
- 5) 京都市役所社会課『商工徒弟に関する調査』1, 2 1926

V. 農家の生活世界と学歴

1. 課題

かつては、学校教育を前提とする世界と農村の民衆の生活世界とは鋭く対立していた。宮本常一がいうように「子供たちの教育には、ふたつの道があった。ひとつはその親たちが、生活手段を身につけさせるための教育であり、もうひとつは学校教育であった」¹⁾。人々の人生設計の中で必要な知識・技能・パーソナリティーは、学校教育が前提とし目標とするそれと同じではなかった。それゆえ「学校で表彰される子と、村でほめられる子が一致しなかった」²⁾のである。宮本はもっぱら初等教育について論じているのだが、中等教育はなおさら、人々の生活世界にとって異質な存在であったらう。

戦前期のデータで農業層が他の社会集団に比べて子弟に中・高等教育を受けさせる割合が低かったことは、金銭的に学資支出が不可能という経済的要因だけでなく、上に述べたような中等教育を経由するライフコースと彼らの日常生活世界とのズレの大きさにも依っている。太田敏兄が自小作・小作層に対して1924年に行った調査³⁾でも、「百姓に学歴は要らない」という意識は根強く見出される。農家の人々の生活世界はある時期まで学歴主義的な世界と無縁に存在していた、あるいはごく部分的な関わりしか持っていなかったのである。

ところで、戦後農村に関する多くの調査・研究が描き出すのは、もはや学歴取得が無視できない問題になっていく農家の姿である。すなわち農民子弟の学歴取得が離農⁴⁾や青少年の向都離村⁵⁾の問題の中で論じられたり、都市と農村部との教育機会格差の問題⁶⁾として論じられたりするようになる。それらは以前とは異なって、農家の子弟の多くが中・高等教育への進学を希望するようになったことを

明らかにしている。また、そもそもこうした問題関心で研究がなされること自体、農家の子弟の人生設計の中で学歴が重要なものとされるようになったことを示している。農家と学歴の関わりが変化し、前の章でみた旧士族や商家と同様に農家もまた、学歴主義的な世界に取り込まれてきたのである。

問題は、農家の人々の生活世界にいつ・どのように学歴主義が浸透していったのかという点である。学歴主義的な世界と無縁に存在していた、あるいはごく部分的な関わりしか持たなかったかつての農村共同体が社会全体の学歴取得競争の中に巻き込まれ、離農・向都離村していく農家・青少年達が増加していく中で、解体に向かうその転換の時期とプロセスが明らかにされなければならないのである。本章の課題は2つの集落の全戸聞き取りを通して、農家の人々の生活世界にいつ・どのように「学歴」が重要なものとして浸透していったかを跡づけることにある。

事例の検討に入る前にいくつかの先行研究に触れ、ここでの視点を明らかにしておきたい。戦前期の農民にとって学歴取得がどういう意味を持っていたかを正面から検討した研究は、これまでほとんどない。わずかに浜田陽太郎⁷⁾や吉田文⁸⁾および小林輝行⁹⁾の業績が見られるにすぎない。浜田は農業系の中等教育学歴が農民にとって社会移動を目指すものではなく、むしろ村落共同体内の階層再生産に寄与するものであったことを指摘し、吉田は農業学校利用層の通時的変化をたどって、農村地域における中等教育機関の人材選抜・配分機能の変化を明らかにしている。これらは農家の人々にとって学歴の意味が他の社会集団のそれとは異なっていたことを示した点で注目になる。しかし前者は通時的変化を扱っておらず、また後者は中等学校利用層の分析であるため進学しない者・できない者の分析を欠いている点で、いずれも部分的な姿しか描き得ていない。

明治中後期の農家の教育観と子弟の進路を検討した小林の研究は、ここでは我々の問題により深く関わっている。彼は多くの自伝を資料にして、子弟に対する教育観・学校教育がもつ価値の評価が上層農家と中下層農家で異なっていたこと、同時に実際の子弟の進路も階層や出生順位(長男か次三男か)によって異なっていたことを描き出した。例えば「家」の意識が強固で学校教育を「家」の発展と関わらせて評価する上層と、生産労働の場での教育を重視し学問不要観を持つ中下層といった階層差の指摘は注目になる。農家と学歴の関わりを考える際には階層・出生順位別に細かく分けて検討しなければならないことは明らかであろう。

さらに彼は次に引用するように、明治後期に教育観の大

きな変化が始まったことを指摘している。「農家の学校教育観は明治後期に至ると『家』の創造的・開拓的立場から把握された立身出世の階梯としての学校教育観の台頭がみられるとともに、中下層農家における学問不要観にもとづく否定的学校教育観から、子弟の教育を全面的に学校に委ねるといった如き肯定的学校教育観への転換という大きな変化があらわれている。」¹⁰⁾——学校教育を社会的上昇移動のチャンネルとして積極的に位置付けるようになってきたというのである。実際の子弟の進路を見ても上層では、中・高等教育機関への進学が増加し、中層でも進学者が増えていったことが述べられている。

明治後期に学校の見方が転換したというこうした小林の指摘は農家と学歴の関わりの問題を十分に説明しつくすものだろうか。小林自身が指摘するように、上層では家名や家産の維持を目的とした立場からの学校教育観——社会移動を嫌う見方——が、中下層では学問不要観にもとづく否定的学校教育観がその後も根強く存続している¹¹⁾。農家の日常意識は学歴主義的な世界観に抵抗し続けたのである。生活世界に学歴主義が抗い難く浸透していったのは、もっと後の時期ではないだろうか。

さらに、自伝をデータとする小林の方法からくる問題点もある。自伝を書き残した者の多くは社会的上昇移動を遂げた「成功者」である。それゆえ、とりあげられた事例が同じ階層出身者のうちでも学校を好意的に評価し積極的に利用した者——学校観・教育観の変化を先取りしたグループ——に偏ることを避けがたい。そのため一つは変化の時期を早く見すぎてしまうおそれがある。もう一つは、「成功者」になれなかった者達——進学もせずに村で黙々と家業に精出すグループ——の学校観・学歴観の検討が不十分にならざるを得ないのではないだろうか。

農民諸階層の学歴主義への包摂をトータルに描くためには、実際に村の中で起こった変化をたどってみるのがどうしても必要である。我々が①様々な年齢層のデータから通時的変化をたどり、②インテンシヴに集落を丸ごと見ていくことで農家の諸階層全体の動向を明らかにする方法をとったのは、これらの先行研究が持っていた限界を克服するために他ならない。

この方法により、問題を見ていく際のカギとして農家の場合、まず第一に上層か下層かという階層差の視点、第二に長男・次三男という出生順位の視点が重要であることは上で見た通りである。そして第三に家業の継承あるいは家の継承の問題が重要である。学歴を介した社会移動の持つ意味が大きな変化が生じたのは、家業・家産の維持という形で「家」を語るができなくなる時期がやって来た時であろうからである。以下の具体的事例の分析では、農家

の生活世界への学歴の浸透を階層・出生順位・家業や家の継承という視点から考察を進めるが、前二章と同様に、そのプロセスをここでも出生時期と階層の異なる 2 人のライフヒストリーを手掛りにして、聞き取りで得られた全体の動向をまとめていく形であとづけることにしよう。

2. 明治末～大正前半期生まれ

〈ライフヒストリー 4〉

A さん (明治34年生, 1 町 5 反自作農家の長男¹²⁾)

篤農家であり、教師もした A さんは豊かな農家の長男として、3 男 1 女の一番上に生まれた。尋小 6 年卒業時に彼の学校は、男子 32 名・女子 20 名でそのうち鳳鳴中学へ行ったのは 6 名、女学校へは誰も行かなかった。高小へ進学したのは男子 16 名・女子 11 名で残りの男子 10 名・女子 9 名は進学しなかった。①

彼は中学進学を希望したが家族に反対されて断念した。

私も中学校へ行きたい。S 君も行くのだからと父に願ったが「百姓の長男が中学校へ行ったら、百姓の後を継がずに、月給取りになるから」と、祖父金助と二人で許して呉れず、それでは農業を継ぐから、三田農林学校(当時は乙種二年制)へ行きたいと言ったが、それも許されなかった。②

弟 (M37) : 高小 2 年卒→工業学校 (大阪) 卒→変電所勤務の傍ら夜間高等工業に学ぶ→技師 (大阪) →25 才で病没

弟 (M40) : 高小卒→浪人 (1 年) →御影師範→在学中に同村内の養子に→篠山地方で小学教員

妹 (T 2) : 篠山女学校→菓子卸商へ嫁す (池田) 19 才

大正 4 年に高小を出ると彼は家の農業の手伝いの傍ら、週 2 回補習学校に行き、青年団にも入団した。8 月には酒造講習に出て、その冬から祖父に連れられて 22 才まで酒造出稼ぎに毎年行った。最初は日給 21 銭であった。③

大正 5 年になると彼は「父の進めもあり、謡曲と生花の稽古に殆ど毎晩通った」。場所は約 3 キロ離れた篠山の畳屋であった。その後も数年間熱心に稽古に通い、生花は 22 才のとき遠州正流免許皆伝を受けるほどになった。また胡弓や尺八・薩摩琵琶なども人について習い、尺八の演奏会や生け花展に出場・出品した。

こうした習い事だけでなく彼は篤農家としても一生懸命活動した。郡の公会堂で開催された三田農林の講習会に参加するなど (19 歳)、あちこちの農事講習に欠かさず参加したり、郡役所の農業技師に指導を仰いだり、1 枚任さ

れた田を研究田として試行・調査・記録して郡の農業品評会に出品して一等を取ったりした。「進歩的で理想的な農業を願望」(20 歳) していたのである。22 才になって、農事試験場で本格的に勉強することについて家庭の了承を得た。

来春より一カ年間、農事試験場に入所して進歩している農業の理論と實際を体得することを熱望し父や家族に了解を得たが、その条件として来春嫁を貰うことであった。

家族の意図する所は、嫁をとり、嫁を家に置き留守させておけば、一年後必ず帰農して家業を継ぐ、との「おもわく」である。

寸暇を惜しんで国語・算数の勉強をした彼は、4・5 倍の競争のトップで合格した。県立明石農事試験場での 1 年の勉強の間に「農業技手だけの資格を得るだけではいけないと奮起し」発動機運転の資格も得ると共に、小学校農業科正教員の検定試験にも合格した。

彼はその後、美囊郡奥吉川村に農会技手兼補習学校教授嘱託として就職し (単身赴任) 翌年水上郡小川村立農業補習学校助教に転じ、勉強を続けて文検 (文部省実業学校教員検定試験) に合検 (26 才)、昭和 2 年、27 才のとき自分の村の農民学校教諭に転任して自分の家に戻った。奥吉川村で 40 円だった月給は 80 円になっていた。さらに昭和 6 年以降、水上郡の公民学校・多紀郡古市校を経て、昭和 14 年に多紀実業学校の教員になった。中等学校の教員になることは彼の長年の夢だった。

戦時中に青年学校の校長になっていた彼は、昭和 20 年の敗戦で「悩み考え抜いた揚句」文部省に退職願いを出して、22 年ぶりに農専業へ戻ることにした。その後は県の米多収穫競進会で 2 等入賞するなど再び篤農家として活躍し、昭和 41 年に長男に家計を任せることにしてその後は悠々自適の老後を送っている。

これは大正期頃までの上層農家と学歴の関わりを比較的好くあらわした事例である。この事例と聞き取りによって得られた証言とによって、大正中期生まれの世代までの農家の生活世界と学歴の問題を考察する。事例中に付けた①～③に沿って、以下(1)では村内青年の進路について、(2)では出生順位の問題について、(3)ではこの地域特有の副業であった冬季の酒造出嫁ぎと絡めて、農民のライフコースを考察する。

(1) 村内青年の進路

我々の聞き取りでは、農家の子弟のうち明治生まれの世

代については、中学や高女に進むものはごく僅かで、高小にも行かず尋小だけで終わるものがかなりいた。大正生まれの世代になるとほとんどが高小には行くようになっていくが、中等教育へ進学者はまだ僅かであった。その頃、中学・高女への進学・非進学を規定していたのは、家の経済状況と出生順位であり、成績は2次的な意味しか持っていなかったようである。

実際この時期の進学者は1町以上自作の富裕層に限られていた。しかし事例5-1や5-2が示しているように、この層でも大正初めごろはまだ中学・高女へ進学するのが当然というわけではなかった。上層農家でも中等教育に無関心な家が存在していた。

〈事例5-1〉上層農家の例1

…まあおとうさんなんか、そのお、あの、銀行行くとかな、役場行くとかいうような人やったらやっぱり自分の跡つがしたいさかいね。そういう人のうちの子はね、あの、行った人もありますけどね、もう百姓家の子ではそない行った子、おへなんだ。

(自分のクラスから2人中学へいったというBさんM37生まれ—以下M37, T3, S5というふう略記)

彼女の家も1町2反を自作する中以上の家だったが、兄は高小出であり、本人も高小卒業後補習科まで行かせて貰ったことを「一番最高の勉強させてもらうて」と言っている。

〈事例5-2〉上層農家の例2

Cさん(M35)は2町半の豊かな農家の長女に生まれたが、兄2人について次のように言っている。(兄2人は)「(当時既に)鳳鳴中学ができてんのね、(父が)それに——中学校に——やらずにね、お宮さんの宮司さんにね、いろいろと教えてもらって……お父さんがカチカチなんやもんで、漢詩だとか漢文だとか論語・孟子とか孔子やかいうのをね、そんなのを教えてもらうて…実力さえつけたらええねんと言うて(兄達を中学へ)やりませんでしたわ。」

他方、中以下の層の農家にとっては、事例5-3で見られるように、「自分は行きたいと思わなかった」とか「余裕のある家は高等科へ進んだ」といった具合に、中学・高女は現実的な進路選択の対象ではなかった。長男は家を継いで百姓をやる。次・三男は家の手伝いをしながら養子の口を捜したり、大工や左官など手に職を付けたりするか、あるいは都会に丁稚奉公や見習い奉公に行って独立するのを目標とする、といったことが、中以下の層の一般的な

ライフコースだった。彼らの人生の見通しは別段学歴を必要とするものではなく、また、「なまじ勉強すると怠け者になる」という言葉に示されるように、高い学歴を嫌う雰囲気もあった。

〈事例5-3〉中以下の層

中学へ行った人は「『身分の高い』人。地主や惣代さんの息子。中学へ行ったのはクラス4人。ほんまに限られた家しか行かなかった。差別があった。自分も行きたいと思わなかった。」(Dさん 男 T3 小作農の3男)

「ある程度余裕のある家は高等科まで進んだが、そうでない人は灘へ奉公に……」(女 T3 5~6反自作兼1町小作農2女)

「自分達のクラスで中学へ行くのは村長や村会議員や区長や神主の息子だけだった。豊かな家だけが行き、小作百姓の息子はとても行けなかった。」(男 T4 小作農の3男)

成績はどの程度進学に影響していたのであろうか。「中学へ行った人は裕福な家庭の子——農家では1町以上自分の田んぼを持った——で、成績の良い子だった。」(男 T2 僧侶の長男)という感想と「中学へは地主の子とか、比較的小金を持っている家の場合、頭は余り関係無かったように思う。」(女 T8 1町農の長女)という対立する談話がある。これは「小学で中の上ぐらいでない」という程度の学力が必要とされていたことを物語っている。

つまり、富裕な層ではそこそこの成績さえ取れば進学できた一方、自作地1町以下の層では高小へ進むか就職するのが当然とされていたのである。無論親や周囲の意識がそうであっても子供自身は中学や高女に憧れたりすることはある。特に成績が良い子はそうであった。そういう、よほど成績が良い場合には、先生が家庭を説得して進学させるという事例も散見される。そうした事例を次に挙げておこう。

〈事例5-4〉学校教員による進学勧め

「おばあちゃんは『勉強しても嫁に行ったら嫁ぎ先の家風に合わないかん。勉強したらかえって合にくい。(だから)家の手伝いせないかん』といった。(でも)高女には行きたかったので担任に頼んで親を説得して貰ったが、自分を家の手伝いのために置いておきたいと父が手を合わせた。」(女 T6 「裕福ではない」農の長女)

「自分は高等科卒で、中学へ行くつもりはなかったが、

高小2年の時成績が一番で、担任の先生が出てきて、親に『行ったらどうか』と説得に来た。(Eさん 男 M38 1町4～5反農の次男)

Dさんの兄(次男)はこうした中で最も恵まれた例であった。成績が良かったので学校の先生は彼の進学を家庭に説得した。「学校の先生が鳳鳴(中学)にやれというた。そんな身分じゃないとみんな思っていた。先生が何人も来て勧めた。」そして「金持ちで台湾に住んでいる親戚が(兄が)鳳鳴中学2年の頃、『うちに来たら大学に行かせてやる』といて準養子にした。」かくして小作の次男に生まれた彼は広島高工に進んで後、ブリヂストンの副社長にまで進んでいる。

(2) 出生順位

次にこの時期の出生順位の問題に移ろう。進学・非進学の問題は今述べた通り富裕な層だけの問題だったが、そこでは出生順位による異なる処遇がなされていた。すなわち、最初に見たAさんの事例が典型的と思われるが、中学校は子供を給料取りにするためのものと受け取られており、それ故上層農家でも長男と次男以下の教育には差が付けられていたのである。後継ぎは高小またはせいぜい農業学校へ、次・三男は学歴を付けて給料取りにしたり他家の養子・婿養子にするという具合に。これは事例5-5、5-6のようにこの世代の富裕層に一般的に見られる傾向である。

ライフヒストリーを掲げたAさんは、勉強を続けて教員になって地域の中で俸給生活者になったのだが、事例5-5のように長男は農専業という例も広く見出される。おそらくAさんは先生をやりながら農業に携わるということで家族も納得したのだろうが、高小以上の学校教育を受けることに対しては、常に父や祖父の抵抗・警戒がつきまわっていた。学歴は長男には不必要なものであるばかりか、都市へ流出させてしまう危険を伴うものと見なされていたようである。実際我々のデータで見るかぎり、多くの上層農家の長男は「学歴」とは無関係に農業一本でやっていた。

〈事例5-5〉上層の長男

「当時長男は学校へ行くより農業の仕事をするべき。勉強したらどうもならん。次男以下は勤めに行くために鳳鳴へ。都会に出て仕事に就ける(から)」という風潮があったと述べるFさん(男 M35 1町自作農兼役場助役の長男)は勉強が得意だったにもかかわらず高小に行き、3人の弟は鳳鳴中学に行きそれぞれ神戸・大阪・西宮で事務職に就いた。

Gさん(男 M43 1町2反自作農の長男)は高小を経て、三田農林に進んだ。「鳳鳴に行きたかったが、親が農家の後継ぎとして農林学校へ行くことを勧めた」のがその理由だった。彼は卒業後農兼杜氏として家を継いでいる。

これは長男の話だが、上層の次・三男で地域に残っている者のキャリアを見ると、養子に入ったり、長男が亡くなって家を継いだりしたため地元に残った者がほとんどである。しかし、こうした次・三男の家継承や地元定着は、この時期にはまだごくわずかである。それは戦死者を多く出した大正中期以降生まれの世代に多く、それ以前の明治～大正前半生まれの世代で中等以上の学歴を取得した次・三男は、ほとんど都会に流出している。この時期の上層農家の次・三男は学歴を媒介に都市の俸給生活者層に転出したのである。

〈事例5-6〉上層の次・三男

Eさんの場合、「兄も本当は農学校に行って勉強したかったのだが、父がいなくて自分は行けなかったから、せめて弟は行かせてやれと言ひ、母も賛成してくれた」。彼は中学3年のとき、近所の農家の養子に入って跡取りになり、高等農林卒業後公務員・教員をしながら農業に携わっている。Aさんの末弟とよく似たキャリアである。

Hさんは尋小の頃は中学に行く気が無かったが、高小1年を修了後中学に進学した。それは「兄が、弟である自分が百姓になって分家することを嫌って、学校へ行くことを勧めたから」であった。順調に行けば彼は中学を卒業して都会に出ていったかもしれないが、家を継ぐはずだった兄が亡くなったので3年で中退した。その後は家の手伝いをしながら篠山の銀行に勤め、のち本家は兄の遺児が継いだ。彼も新宅と田の三分の一を貰って分家した。

(3) 酒造出稼ぎ・兼業化

次に少し寄り道のように見えるが、酒造出稼ぎと兼業化について見ておきたい(表15・16)。表を見ると農家の現金収入の中心であった酒造出稼ぎが大正期以降衰退し、逆に昭和10年頃から兼業化が進行している。通勤可能な距離内に給料取りの口がふえて、農家の現金収入獲得のパターンが変化していったのである。夏は農業・冬は出稼ぎという生活パターンから、地元で農業をやりながら会社や工場へ勤めに出て現金収入を得るといったパターンへの変化には、昭和初年が大きな転換点になっていると思われる。

表15：多紀郡の酒造出稼ぎ者の推移

M33；5100	T 15；3364	S 35；1913
35；4293	S 14；2108	40；1833
38；5500	20；1069	45；1439
T 5；4102	21；1345	50；1220
10；3439	30；2612	

(『篠山町百年史』285頁)

表16：多紀郡農家の兼業率

昭和	3	10	25	30	40	50	(年)
専業	72	75	41	24	9	5	%
兼業	28	25					%
農主体			40	46	50	20	%
農副			19	29	41	75	%
計	6535	6441	6987	6892	6524	6035	

(『篠山町百年史』)

ここまでの話をまとめておこう。要するに中等教育以上の教育が与える証明である学歴は、大正期までの農家の人々にとって彼らの生活に無関係であるか、あるいは周知的なものに過ぎなかったのである。次節では、もう一人のライフヒストリーをたどって、昭和期以降の学歴意識の変化について見てゆくことにしよう。

3. 大正後半～昭和期生まれ

〈ライフヒストリー5〉

Iさん(大正12年生、自作農(7～8反)の次男)

大正中期以降生まれの世代の豊かでない層を代表するIさんの歩みは、「学歴」が村内下層にまで広がってきた様子を物語ってくれる。彼は2男1女の2番目に生まれた。

勉強は「得意」だったが、経済的に中学へ行けず、高小を経て役場の小使いとしてしばらく家から勤めた。兄も妹も高小どまりだった。①

そして彼は2年後昭和16年に大阪の通信講習所へはいった。

「自分は中学へ行きたかった。かつてほど中学へ行く人間が少ないということもなく、3割程度の人間が進学するので(自分も)中学へ行きたかった。(実際は48人中12人)しかし家の経済力の関係で父に許可して貰えなかった。しかし勉強したい気はあったので高小卒業後通信講習所へ2年間行くことにした。」

(高小卒業後)「徒弟制度に基づいて徒弟に出る人もいたが、自分としてはそれは嫌だった。だからそういう人は給

料取りになるために、こういった種類の職業学校へ行った。」②

「家は貧しかったのでねー。そうやって役場におったかて分家して田んぼを分けて貰うようなこともできませんしね。」(で通信講習所へ行くことにした。)③

彼は学校から支給される金と家からの仕送りで勉強した後、神戸の中央電報局に勤めた。その後は19年に召集され台湾で終戦を迎え、21年に復員して神戸に帰ってきた。本来ならそのまま神戸に居続けるはずだったが、兄が戦死していたため篠山に帰ることになった。④篠山の郵便局に転勤して勤めを続けながら、実家で農業に従事、定年退職後は農業の傍ら倉庫管理人になって小遣いを稼いでいる。

妻は昭和2年生まれ、隣村の農家に生まれ高小卒業後大阪の教員養成所・看護婦養成所へ行き、母校の小学校の養護教員となり、昭和27年に見合いでHさんと結婚した。学校卒業後は大阪で看護婦をしていたが、終戦後「一辺両親の顔を見に帰ろうと思って」生家に帰ってきていたら、母校の校長から声が掛って教員になったという。

子供は女の子2人。Iさんは「自分の子供には嫌だというなら(勉強を)強いない。女だし、高校出たら就職しても良いと言っていた。というのは高卒のほうが就職が良かったから。」でも「わたしは(小学校から就職まで)大分遠回りした。心の隅に悔いが残らんように自分の行きたいところはあるまでやらしてやってください」という妻の意見もあり、結局二人とも進学させた。④長女は鳳鳴から神戸女学院に進学した。次女は鳳鳴から湊川短大に進んで保母になっている。

Iさんも奥さんも働きながら二人を進学させたが、「今ほどまで(学歴重視の風潮が)行き過ぎましたら、あの時いろんなことで苦しかったけども、(大学・短大)へやらしといて良かった」と言っている。

しかし後継ぎのことは現在の悩みの種になっている。④Hさん自身は生まれ育ったこの家を娘2人のどちらかに継いで欲しいと思ってきた。「2人とも出したらあかんということで、妹のほうは長いことひっぱとったんやけど」、とうとう結婚して外へ出ることになり、「やはり子供の将来のために、親が足引っ張っては駄目だ」と考えて、諦めかけているのが現在の状況だという。

この事例は大正末に生まれて昭和10年代に学校に行った、中の下ぐらいの農家の次男の歩みだが、学歴主義が農家の生活世界に広がってきた様子をよく示している。①から④の諸点を他の聞き取りの例とつきあわせながら、考察を進めよう。

(1) 出生順位と学歴

大正末～昭和初期生まれの世代の回想には、それまでとは違った2つの傾向が見られる。一つは長男も中等教育に行くようになるということ、もう一つは下層農家でも学歴が、自分達の人生上の選択肢として・あるいは自分達の生活に関わり合うものとして、問題になり始めたということである。そしてそれは「給料取り」の生活が、地域の中に具体的な姿をとって広がってきたことと無縁ではない。まず長男についてみていこう。無論まだ長男が学歴を媒介として都会へ出ていく家は多くはない。この点についてIさんは次のように話している。

〈事例5-7〉 Iさんの談話

「あのね長男についてもね、やっぱり学校の先生は（進学するように）誘ったね。（それで）やっぱりそういう方はそういう道を行っておられますよね。長男だから即百姓というような家もありますし、…各家の事情ですからね」

Q「この辺で例えば長男であるけれど出ていったきりなんて方は…」

A「ありますよ…。こういう社会情勢の仕組みと言うんですかいわゆる経済事情とか、その人が帰ってきて百姓するよりも、やはり外へ出て事業なりそういうものを興されるというような方は、こっち帰っておられませんのでね。」

Q「そう言う方はやはり大体中学校とかそれ以上進学されて、出ていかれるわけですか。」

A「そうですね。ほとんどそうです。…いわゆる旧制の中学校出てあるいは専門学校出てあるいは大学を出て、そして向こうで就職して向こうでそのままずっと生活しておられると。で、こちらの方で両親亡くなられても帰らずに向こうにおられるというような方もあります。

Q「そういう場合っていうのはお家のほうは次男・三男の方が継がれると…」

A「次男・三男…。いわゆる兄弟の方が留守しておられる方もありますし、ぜんぜんおられないところもあります。」

全部の家においてというわけではないが、長男が次三男と同様に中等教育をうけ、場合によってはその後都会へ出ていくという事態が始まったことがわかる。Iさんは長男に学歴をつけさせるかどうか「各家の事情」になったと語っている。これは以前のような一元的な考え方、つまり長男は家を継承しそれゆえ学歴不要という考え方、にひびが入ってきたことを意味している。結論を先取りして言え

ば、先に見たように兼業化の広がりや下層での離農の増加なども相俟って、家の存続・継承のための多様な戦略が登場し、それにつれて学歴取得のパターンも複雑になってきたのである。

確かに長男は家を継ぐものという考え方はまだ支配的だったが、他方で出生順位に関わりなく「できる」子には上の学校に行かせようとする者や、離農を家の戦略とし、そのために学歴を重視する家も現れる。それゆえこの時期には、長男と中等教育の関わりが様々になってきたのである。

我々のデータは地域在住者のみを対象としているので、学歴を得て挙家離村した家に関しては詳しいことが分かっておらず、これは今後の別のデータからの検討を待たねばならないが、地元に残っている長男達の例だけ見ても、彼らと学歴の関わりが複雑化してきたことがうかがえる。

事例5-8は最初に見たAさんが農事試験場を志した動機と同様に、「より良い農業を目指して中等教育に就学した例である。彼が農学校へ行ったのは俸給生活者になるための手段ではないし、社会移動の際に有利な「学歴」を手に入れるためでもない。いわば「長男に学歴は要らない」という家の論理の延長上の中等教育就学と考えてよからう。これは浜田が農民に特有の、「社会移動と結びつかない学歴」と呼んだものの一つの例であろう。実際この人は離農者の田を借り受けたりして、2町7反を耕作する専業者として生活している。すなわち農家としての家業を守っていくための中等教育の利用なのである。

〈事例5-8〉 家を継ぐための教育

「長男で後を継がないといけなくて中学へは行けなかった。母親も小5の時死んでいたし。」彼は長男ゆえに進学できなかったが、高小・青年学校を経て18歳の時加西農学校に行った(2年)。「兵隊に取られてどないなるか分からん。でも将来を考えて、農業をやるならまなばなあかん、中学へ行けなくて(残念だった)という気持ちも。

その後は農専業、弟は東京の製菓学校を出て伊丹で製菓業を営む。

(T13 8反農の長男現在1町6反自作, 1町1反小作)

ところでこの時期には豊かな農家の多くが、長男にも当たり前のこととして中等教育を受けさせるようになってきた(事例5-9～5-11)。「長男だから」という属性は中学から先の進路について問題になり——長男には中学のみ・もしくは師範系という者が多い——同時に、余裕が

ある限り子供には全員高い教育を受けさせるという傾向や、「行けるだけ学校に行かせる」という考えも、上層農家では登場してきたことがわかる。

〈事例5-9〉上層の学歴意識1

尋小卒後鳳鳴中学へ。「親はわりと教育熱心で、ある程度は勉強を押し付けていた。」中学卒業後は約10年間阪神で会社勤務(大阪製鋼)。「自分は長男だったから上の学校には行きたくなかった。で、戦時だったから家におれなかったから、会社行くしかなかった。」28歳のとき生家に帰りその後は農業に従事。

(男 T14 田1町5反, 山20町, A家の本家の長男現在田1町山15町)

〈事例5-10〉上層の学歴意識2

明治26年生まれの人Jさん(男)は当時まだ少なかった高小卒だが(27・8人中4人)、「惣代をやるようになって人の上に立つ場合、侮辱されないように自分の頭をみがいていないとだめだ」と、上級学校へ行かなかったことを残念に思っていた。また奥さんも父が早く亡くなったため「遠くの女学校には行かせて貰えなかった」。それで「とにかく自分と妻は勉強できなかつたので、子供は13・4年の教育は受けさせてやりたい。だから子供には勉強せい、勉強せいとたきつけたほうだ。学歴にしろ何にしろ何か人より秀でる所がないといかん。」と考え、4人の子供たちを皆高等教育にやった。

〈事例5-11〉上層の学歴意識3

2町半の農家の長女に生まれたKさん(女 M35)は「女学校へ行きたかったが、兄が長男ゆえ中学に行かせて貰えなかったために自分も女学校には行けなかった。」それで自分の子の教育には力を入れた。「当時あまり上の学校に子供をやることは世間体のいいものではなかった。勉強させて病気になるたり、生意気になったりしたら何を言われるか分からなかった。主人の母はそのことを心配してあまり上の学校へやることをためらったが、自分は——自分も高女に行きたいという夢を実現できなかったこともあって——子供には自分の好きなだけ学歴をつけさせてやろうと思った。」

また、学歴を得ることによって、教員のように地元で給料取りの職を得て、兼業しながら家や農業を継ぐという例もふえてくる(事例5-12, 5-13)。家を継ぐべき長男に学歴をつけて、地元で「給料取り」になれるよう期待しているわけで、これは中層以下の家の存続のための戦略の

一つの在り方を示しているのかもしれない。事例5-13のLさんは、農学校卒業時に同級生に人気のあった進路は「教員・鉄道員・巡査だった」と語っている。農学校が農業の知識を教えてくれるからではなく、地元で就職するのに有効な学歴を与えてくれる場として、重要になってきたのである。この点は事例5-14のMさんの言葉でもっとはっきりわかるだろう。

〈事例5-12〉家を継ぐための学歴1

尋小卒後中学へ、進学は「自分の意志が大きかったが、父も賛成してくれた。先生は特に勤めはしなかった。」中学卒業後、兵庫師範へ。中学在学中から「教師になるつもりだった。というのは、金がかからない、軍隊に行かなくて良い、実家から通う勤めになるから。が、経済が許せば旧制高校へ行きたかった。」師範卒業後は主に生家からの通いで教師兼農で、校長になったあと定年で退職。弟は高小卒で、大阪に住んでいる。

(男 T14 「余り豊かではなかった」約1町農の長男)

〈事例5-13〉家を継ぐための学歴2

Lさん(T15 4反自作1町小作の農家の長男)

尋小卒後篠山農学校・県の教員養成所を経て教員に。農学校に進んだのは「父が百姓より他の仕事を見つけたらと、百姓は厳しい上もうからないので、給料の取れる仕事につけるようにと考えてくれた。農学校と云っても百姓を継ぐために進学したわけではない。勤めたほうが生活が安定するという考えが、父にあったからである。」農学校卒業後は「先生なら百姓と両立できるので」兵庫県の教員養成所に行った。弟は小学校のみである。

〈事例5-14〉昭和期の農業学校

三田農林に行ったMさん(T13 1町8反農の二男)が語る当時の状況である。

「まあ言うたらね、高学歴ですわ、昔の中等学校出とったら。まあそれに軍隊行ってもたぶん、ばーんと将校になれるしね。それでやっぱ、それを出といたらまあ一生食いっぱぐれが無いっていうのかな。」

Q(当時)「学歴という言葉はなかったんですか。」

A「ウーン、学歴いうのはあまり言わへんかったけどね…。実業学校入ったんかて、結局、百姓の子弟やのうても普通の商売人の子でも、月給取りの人でもね、勤め先がね、保証されるもんね。」

Q (当時)「中等学校出たらどういう (職業の) 方面があったんですか。」

A「まあいろんな方面あったんでしょうけど、なんぼ職無いゆうでも中等学校出とったら、(例えば) 早い話が鉄道行きますわな。そしたら普通, 高等科出て入ったら駅夫から入りますわ。そしてゆうたらテスト受けて雇員になりよった。そして雇員になると、ここに一本黒い線が入りよったんですよ。つまりもう本雇いやね。それが中等学校出とったら、それがすぐはいったときから雇員で入とったんですよ。…そこで少し勉強して、そして試験受けて来たらまあ判任官待遇で線も 2 本入って、ここに桐の紋で名前を入れて 5 年もくれたら…やっぱり出世も早かったですよ。どこに入ってもね。ほいでまー, 警察に入ってもね…… (以下略)」

(同級生の進路について)「そりゃー純粹に百姓しとる者もありますよ。直, 農家でね。まあ, 本家に家継ごう思うてる者はそないしてるけれども。弟身分やとか, あんまり田んぼよけい無いもんはみなあちこちに (勤めに) 出てね。… (中略) …まあほんまの自営のための自営やね。そのための勉強に行くとるというよりも, 同級生の殆どの者が県庁にはいったら…始めはあの一農会いうのがありましたな…そこの指導員にみなボンボン入ったそうですわ。そういう方面から県庁のほうへ (移ったり) …, 農林事務所とかね。こういう関係の方で指導的なほうへ, みな入っていきよりますけどな。」

農学校へ行くと「食いっぱぐれがない」「勤め先が保証される」「出世が早い」というわけである。昭和の10年代には農学校進学者の主流は明らかに、勤めを前提とするようになっていたことがわかる。とくに「弟身分」すなわち次・三男や、「あんまり田んぼよけい無いもん」、すなわち中以下の農家出身者にとって。

つまり、昭和に入ると、中等学校が学歴を与えるものとして次第に農家により広い層に、注目されるようになってくるのである¹³⁾。この動きは次の丁稚・見習い奉公制度の衰退と密接に関わっている。

(2) 丁稚・見習い奉公制度の衰退

次・三男がどう人生を歩むかと云う点に関して、この時期にかなり大きな変化があった。前節で、出稼ぎから兼業化へという就業形態の変化について触れたが、それと並行してこの時期に丁稚・見習い奉公のキャリアをたどるものが減少し、工員や下級事務職・鉄道員など、下層の勤め人として雇用労働に従事するものが増えてきたのである。そ

れはライフヒストリーを見た I さんのように「丁稚か勤め人か」という選択肢が登場し、後者が次第に優勢になってきたことを意味している (事例 5-15, 5-16)。

〈事例 5-15〉「給料取り」の生活へ 1

屋根ふき職人の家に一人っ子で生まれた N さん (男 T 15) は「屋根ふきはきつい仕事なので (父は) あとを継げとは言わなかった」から、高小卒業後篠山の会社に勤め、2 年後に川西の航空機製作所に移った。大正 10 年生まれのおさん (男) は、同級生の多くが集団就職で機械工場などへ行ったと語っている。学歴が無くても工員・下級事務職・鉄道員などの勤め口が広がってきたのである。

〈事例 5-16〉「給料取り」の生活へ 2

「もともとここで商売を営んでいたが、6 歳のとき父が死んで借金だけが残し、田は 3 反あったがそれだけではどうしようもなかった」という P さん (T 14) は小学校時代勉強が得意で級長を勤め、学者に憧れていた。「希望は中学に行きたかったが家の事情を考えるとそういうわけにはいかず」高小卒業後国鉄職員になり、55 歳まで勤め上げた。彼は子供の教育に力を入れ、息子を京大の大学院にやっている。

(3) 階層と学歴

そうしたことから、下層農家でも「学歴」が自分達のライフコースや家や将来に関わる重要なものになってきた。事例 5-17 のように、兼業化する中で学歴の効用が職場を通して意識されるようになったり、I さんや事例 5-18 のように、高小卒業後さらに何らかの形で教育を受け、資格を得たりして、給料取りとして組織の再末端から出発し、学歴をもった者と競争する者も出てきた。かつては下層農家の子弟にとって「学歴」は、望んでも手の届かないものであるだけでなく、日常生活や自分達の今後の人生に関係のないものだった。ところが今や中等教育に進まなかった者にとっても、学歴が否応無しに自分達の生き方に関わるようになってきたのである。

〈事例 5-17〉「学歴の威力」 1

「中学校には行きたかったが、父親が早死にで経済状況が良くないんで駄目だった」ため高小へ行き、高小卒業後隣の小学校の特習科を経て近くの鉾山の鉾夫に。戦後 23 歳のとき鉾夫を辞め、農業に戻る。「鉾山でずっとやっていきたいと思っていたが、勉強している人間と差が出てうだつが上がらないと思い、農業へ帰った。」その後も「篠山を出たいと思ったが、学歴がないのであきらめた。」

(男 15 1町農(小作?)の長男, 現在も1町)

〈事例5-18〉「学歴の威力」2

農6反の次男に生まれたQさん(T13)は高小卒業後、農兼杜氏に従事しながら青年学校に5年通った。小さい頃から鉄道員に憧れていたが、19歳の時たまたま神戸電鉄の駅員募集に掲示を見て応募して採用された。その後は下積みから次第に昇進し、駅長になった後定年で退職。「努力したので出世も学校出に比べて遅くもなく、後悔はなかった。」と語る。

〈事例5-19〉離農1

篠山農学校へ進学したが「百姓はやりたくなかった(から不本意だった)。親父自身も百姓をやめたがっていた。上納するのがアホらしいから」、卒業後は農兼農協職員を経て、26歳から当時花形だったバスの運転手に。

(男 S6 1町程度の小作農の長男)

〈事例5-20〉離農2

明治42年生まれの人Sさん(女)は今、一人で暮らしている。彼女自身の生き方と子供達の歩みは下層農の2つの世代のある意味で好対象を示している。ここでは彼女の事例を少し詳しく見ていくことにしよう。

Sさんは自作地5反の貧しい自小作農の1男3女の1番上に生まれた。小作は7分通りとられたという。高小1年の途中で子守りのために中退し、「裁縫を家で習ったり他の家に習いに行ったりした」。昭和2年、18歳のとき結婚してこの家にやってきた。婚家は7~8反の小作でやはり貧しかった。長男であった夫は父が早くして亡くなったので、高小1年で中退し農兼杜氏で一家を支えていた(当時26歳)。Sさん夫婦は、周りから色々蔭口をたたかれながらも、長女を神戸に半年下宿させて塾に入れるなど、子供の教育に力を入れた。その甲斐あって長女は明石師範を経て教師に、長男は青山学院を出てフィリピンで貿易に携わり、次女は歯科衛生士学校を出て東京で歯科医院に勤務している。子供達の学費を捻出するため生活を切り詰めただけでなく、戦後農地改革で手に入れた田も切売りして、すっかり手放してしまったという。Sさんは次のように述懐している。

Q(長女を明石師範に進学させるにあたって)「周りの方々はどうでしたか」

A「おこがましいことはね、私は言うことは出来ませんけどね。随分と笑われたことだけは記憶にあります。そこまですんなり女の子を、何でそんなことさして、いうね、お言葉をい

ただいたことも…随分苦しみました。…(中略)…笑われました。やはり色々な面で。走り過ぎやとか馬鹿やとかね。やっぱり農業(が第一)であって、農業一生懸命せんとそんなことにホイホイして子供のことばっかきにね。ほんとうに今思うたらね…少しは…ほんまにどこの家見たかて立派な家屋敷が出来てますね。田んぼやら、ちゃんと持とったならそれで建てられますけどね。そんなことできないんです。(子供の進学のために)みんな使い果たしてしまうたからね……。」

「財産をね、やる財産が無いのでね、せめて…中等教育だけでも出してやりたい、そしたらまた自分の道も開くとかってね…やるもんはないから、中等教育だけ何とかさせてやりたいと思うのがね、一念やったもんやからね。田んぼのほうも家のほうも本当に、下宿したかて出したかてね、農業だけではね—酒造りに杜氏として行っても—それだけのお金は十分にね、余程な考えないとやれなかったんです、学資を。」

このRさんの家は農業を続けることより、土地を手放してまで子供に進学させることを選択した。Rさんの家はこの場所に生活の基盤を持たなくなったため、Rさん自身いざれば、都会の子供達のところに身を寄せることになるはずである。周りの人に笑われたぐらいなので、下層の農家でこうした選択をした家は、当時まだ珍しかったに違いない。

しかし、戦後農家が農業をやめること、すなわち離農が増加してくるにつれて、Rさんのような事例も珍しくなってきた。農家の自立限界線が上昇し、1町程度の耕作面積ではやっていけなくなったこともあって、「今のような百姓では食っていけない」と、離農の傾向はむしろ一般化している。その結果、事例5-18や5-19に示したように、農業に見切りをつけて、地元で職を捜す家が出てくる一方で、学歴を媒介に都会へ出て行ってしまふ家も増加してきたのである。特に我々にとって重要なのは、学歴を媒介とした家ぐるみの流出である。

K地区ではすでに7戸が廃屋になっている。旧地主の家も子供達が高い教育を受けて「月給とり」になってから都会から帰ってこないため、田を人に預けて出て行ってしまったそうである。現在、子供を全員都会の大学にやったり働きに出して、老人だけが家に残っているところも、調査対象の農家に沢山みられた。今進行しつつある挙家離村がどの程度、子供を大学にやったことの結果なのかは、我々の調査では十分わからないが、子供が高い学歴を得ることによって、都会で「安定した」仕事について、帰りがらないという事情は無視し得ないであろう。生活世界が

学校化し、学歴主義が農家の間にも支配的になっていく中で、多くの家が今まさに、Rさんの家と同様の道を歩みつづつある。

(4) 子供への期待=ジレンマと計算

昭和に入って以降、特に戦後は、今までみてきたように農家の生活世界にも学歴が浸透し、上層も下層も子供の教育に力を入れるようになってきた。確かに、子供の教育についての考え方を尋ねてみると、本人世代が教育を受けた頃にはまだ少数にすぎなかった見解、すなわち「子供が望むだけの教育」「出来るだけ高い学歴」を、という考え方が広く見られる。それは自分達が行きたくても行けなかったからという理由もみられるし、学歴が安定した職をもたらすからという理由もしばしば聞かれた。次の事例はそうした例である。

〈事例5-21〉学歴への期待

長男は父親の後を継いで大工にしたが、次男は苦勞して香川大学にやった。「(夫は)自分が不安定な職(大工)で苦勞しているの、この子だけは自分と違った道へ…しっかりしたところへ…進ませたいと考え、一番下(の息子)だけは頑張って大学へ行かせた。私立はようやらんから、国立へ行けるだけの力があるなら、3べんのごはんを2回にしてもやってやると言い、仕送りと…家と仕事場の三重生活を頑張った。」期待に応じて次男は香川大学に合格、公務員になって県庁に勤めている。

(女 T2 実父も夫も大工)

しかし同時に、依然として家を継ぐべき長男に対して、「学歴の抑制」がなされている家もあるということを見落としてはなるまい。昭和40年代には子供を高校に進学させることはほとんど当たり前になっていたが、しかし、高等教育については家の存続の問題と関って、それぞれの家で違った評価がされていることに気づく。事例5-22~5-24に見られるように、高等教育への進学と家の存続とのジレンマが存在しているのである。

〈事例5-22〉進学と家存続1

娘2人(上はS26生)の進学問題について次のように語る。「上が大学へ行きたいと言ったときも、年子なので2人とも行かせることになるのはかなわないと思い、行かせなかつたら途端に勉強しなくなった。ここではその頃大学に行く人もいなかった。高等教育を受けるとみんな都会に出るし、帰ってこない。親は今を自分は若いと思うけど、そのうち年をとり大変なので一人はこちらに残るように

言った。」

(女 T14 1町5反農)

〈事例5-23〉進学と家存続2

Sさん(女 T11)は「長男は家に入ってくれることを、次男は一人でやっていけるように気をつけた。」そしてHさんの期待通りに、長男は名古屋の整備士学校を出て家に戻り整備士になった。次男は都立大の大学院まで進んで東京で建築士として活躍している。

〈事例5-24〉進学と家存続3

「孫(S26生)は大学へ行かせたかったが、一族のものでここに居なかつたので、墓を守るものがないなかつたので『頼むさかいに家におつてくれ』と言って役場に入れた。当時はだいたい嫌がっていたけれど…」(女 M38 旧6町の地主)

4. まとめ

多くの証言をつなぎあわせて検討することで、我々は丹波の一農村にいつごろ、どのように学歴主義が浸透してきたかをたどってきた。僅か一地域を対象としたものであるうえ、全戸聞き取りとはいってもサンプル数が少ないため、統計的な裏付けを欠いた仮説の提示に留まらざるをえないが、ここまでのまとめをしておきたい。

我々が取り上げた農村集落の伝統的な生活世界の中に、学歴主義が広く浸透してきたのは、昭和の初め頃だった。かつては主に上層次・三男の社会移動の手段であった中等教育は、この時期以降長男を引き付け、下層農家を巻き込んでいった。それは農民子弟の伝統的なライフコース像の崩壊と密接に関わった動きであり、その後は多様化していく家存続の戦略の中の重要な焦点の一つとして、学歴の問題はあらゆる家の関心の対象になってきたのである。

確かにまだ、子供に学歴を与えることと家存続との間には、ジレンマが存在している。しかし、今後農家にとっても、家産・家業の継承という形で家存続が問題としての重要性を全く失うならば——すなわち固定的で世代反復的な「家」の拘束が全くなくなり、子供達の能力や適性のみにしたがって、地域移動や職業移動を行うようになるならば——その時には他の社会集団と同様に、学歴主義が彼らの生活世界を覆い尽くすことになるのかもしれない。

(広田照幸)

注

- 1) 『宮本常一著作集8 日本の子供たち・海をひらいた人び

- と』未来社 1969 46頁。
- 2) 同上 51頁。
 - 3) 太田敏兄『農民意識の社会学』明治大学出版部 1958。
 - 4) 中川信平「脱農にともなう教育期待の変化」『教育社会学研究』第16集 1961 等。
 - 5) 神田嘉延『現代農村と社会教育』高文堂出版社 1986 第4章、安藤義道『現代農村生活の課題と教育』明文書房 1985 第5・6章、等。
 - 6) 続有恒・赤木愛和「職業観の形成に関する研究 (IV)」『名古屋大学教育学部紀要』第2巻 1956、森口兼二「進学機会の規諸定因子に関する一研究」『京都大学教育学部紀要』第6巻 1960、仲新「愛知県における中学校卒業者の就職とその移動状況」『教育社会学研究』第7集 1955、等。
 - 7) 浜田陽太郎「農民の学歴取得の意味について」『一橋橋叢』第64巻6号 1970。
 - 8) 吉田文「戦前期の農学校」『東京大学教育学部紀要』第25巻 1985。
 - 9) 小林輝行『近代日本の家庭と教育』杉山書店 1982。
 - 10) 同上 99頁。
 - 11) 同上 85頁。
 - 12) これは聞き取りのデータではなく調査対象の隣の集落の人の『自叙伝』(S52)に依拠している。我々の聞き取りデータ以上に詳細な情報を含んでおり、以下の論点を併せ持った事例なので取り上げた。
 - 13) Mさんはさらに次のように言っている。「僕らの時代はね、まだ百姓で十分いけた時代やから、ほとんど学校行ったさかいゆうて、都会に出るものはなかったです。ほとんどいまの若い者です、出ていくのは。」と。Mさんは学校行っても地元に残っていたと言うが、これは中等学歴がちょうど地元に残るにふさわしい程度であったことを意味していると取るべきであろう。すなわち、かなり後の時期まで、高等学歴取得者のための勤め先はこの地域に殆ど無かったのである。大正末に生まれたある女性は、聞き取りの際自分の子供達について次のように筆者にグチをこぼした。「勉強するさかいゆうて大学みたいなものにやるんやなかった。農協、役場、銀行、郵便局なんか大卒はとってくれへん。そのころは学歴が高過ぎた。」と。

結 び

丹波篠山における旧士族、商家、農家という3つの社会集団の間に、時間をさかのぼるほど、その社会的な存在形態に応じた文化の差異がみられ、それが教育や学歴について、ことなる価値観や行動様式を生んできたことは、以上みてきた通りである。

旧士族は、明治維新による変革以前に、いわば俸給生活者としての経験をもち、また藩校での教育を生活の切りはなしがたい一部としてきた社会集団である。維新後、かれらが近代学校教育制度の最初の、積極的な利用者となり、近代組織で働く俸給生活者へと「転生」をとげたのは、ごく自然な選択であったといつてよいだろう。かれらは抵抗なく新しい組織と学歴の世界に入り、また学歴取得と組織のなかの職員層へと、次の世代を動機づけていった。

農家や商家は、継承さるべき家業・家産をもっていた点

で、旧士族とことなっている。しかもその家業・家産に、高度の近代学校教育や、その結果としての学歴は必要ではなかった。それはむしろ家業・家産の継承にマイナスに働くものとみなされていた。商家や農家の場合、学校や学歴とのかかわりは、次・三男層から始まった。とくに篠山のような地方小都市の商家、そして近郊農村の、小地主・自作農の場合、家産の分割相続は不可能であり、次・三男層は「イエ」と「地域」の外におし出されねばならなかった。

かれらに開かれていたのは養子の口をのぞけば、第1に丁稚・徒弟をへて商人・職人となる道であり、第2は近代組織のなかの俸給(賃金)生活者への道である。このうち商家の子弟は第2の、農家の子弟は第1の道、というのが大正期頃までの、一般的な選択のパターンであったとみてよい。銀行・会社などのホワイトカラーの世界は、商家の生活世界とさほど遠くないところにある。そしてそれはより高い学歴をもつものに有利に開かれた世界に他ならなかった。

表17: 企業における学歴と職位との関係 (I)

(%)

職位 学歴	職位						全体
	部長	課長	主任	社員	その他		
事 務	大 学	38.7	22.3	24.3	16.5	0.8	14.2
	専 門 ^①	33.3	25.9	24.8	9.6	1.7	9.6
	中 等 ^②	16.5	24.9	23.6	33.5	21.6	30.0
	準中等 ^③	10.7	24.3	25.4	36.3	54.7	36.7
	初 等 ^④	0.8	2.6	1.9	6.9	20.4	9.2
	未 卒 ^⑤	—	—	—	0.2	0.8	0.3
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
技 術	職位						全体
	技師+	技手	職長	職工	その他		
技 術	大 学	13.0	4.5	0.3	0.0	0.2	0.4
	専 門	44.3	16.1	4.6	0.1	5.4	1.5
	中 等	26.6	51.3	24.6	1.1	14.2	4.9
	準中等	13.9	22.2	41.8	28.5	45.9	28.3
	初 等	2.1	5.4	24.3	55.4	29.1	51.3
	未 卒	0.1	0.5	4.4	14.9	5.2	13.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

① 専門+高等学校

- ② 中学校+実業学校+高等女学校
 - ③ 実業補習学校+高等小学校
 - ④ 尋常小学校
 - ⑤ 未卒+不就学
- (出典『実業教育資料』S 6, データはS 5)

農家、とくに中・下層の農家の子弟が多く選んだ第1の、丁稚・徒弟への道は、昭和期に入る頃から急速に狭まり、自立・自営が困難になっていく。それとともに農家の次・三男層は次第に、たとえば鉄道員、郵便局員といった下層の俸給生活者や工場での賃金労働者となる、第2の道を選ぶようになっていった。これらは学歴が必ずしも必要とされない職業であったが、しかし同時にそれは学歴主義的な秩序の支配する近代組織のなかの職業であった。第17~20表は、昭和初年における企業や官営事業における組織内の身分秩序と学歴の対応関係をみたものだが、かれらはこうした組織のなかで生活することによって、学歴の価値を否応なしに認識させられることになった。

表18：企業における学歴と職位との関係 (II) (%)

職位 学歴	職位						計
	部長+	課長	主任	社員	その他		
大 学	2.1	4.4	10.8	81.5	1.2	100.0	
専 門	2.7	7.6	16.5	69.8	3.4	100.0	
実 業	0.4	1.9	5.3	83.7	8.7	100.0	
中 学	0.7	4.6	7.2	77.6	9.9	100.0	
高 小	0.2	1.8	4.3	61.8	31.9	100.0	
尋 小	0.1	0.8	1.4	52.6	45.1	100.0	
全 体	0.8	2.8	6.3	69.7	20.4	100.0	
職位 学歴	職位						計
	技師+	技手	職長	職工	その他		
大 学	39.4	53.9	3.9	2.7	0.1	100.0	
専 門	34.6	47.9	13.4	3.4	0.7	100.0	
実 業	6.9	54.7	24.5	13.4	0.5	100.0	
高 小	0.4	2.5	5.5	91.3	0.3	100.0	
尋 小	0.1	0.5	2.0	97.3	0.1	100.0	
未 卒	0.0	0.2	1.7	98.0	0.1	100.0	
全 体	1.2	4.4	4.4	89.8	0.2	100.0	

(出典：表17に同じ)

表19：鉄道局における学歴と職位との関係 (I) (%)

職位 学歴	高等官	判任官	雇員	傭人	全体
	大 学	59.3	1.9	0.6	0.2
専 門 ^①	13.6	3.1	2.5	0.0	1.3
中 等 ^②	5.1	22.1	22.5	4.5	13.5
準中等 ^③	20.3	59.2	57.3	61.6	59.5
初 等 ^④	—	11.1	14.6	30.2	22.1
未 卒	1.7	2.6	2.5	3.5	3.1
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
大 学	44.6	1.4	0.3	0.0	0.5
専 門	44.0	7.1	2.1	0.0	1.8
中 等	7.6	12.7	12.1	2.1	6.4
準中等	3.8	46.4	59.1	41.1	46.6
初 等	—	21.6	20.6	47.8	36.4
未 卒	—	10.8	5.8	9.0	8.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

- ① 専門学校+高等学校
- ② 中学校+実業学校+高等女学校
- ③ 実業補習学校+高等小学校
- ④ 尋常小学校

(出典：表17に同じ)

表20：鉄道局における学歴と職位との関係 (II) (%)

職位 学歴	高等官	判任官	雇員	傭人	計
	大 学	15.4	28.2	54.2	2.2
専 門	1.3	13.9	83.7	1.1	100.0
実 業	—	12.7	64.2	23.1	100.0
中 学	0.1	11.7	75.7	12.5	100.0
高 小	0.0	6.6	41.7	51.7	100.0
尋 小	—	3.3	28.8	67.9	100.0
全 体	0.1	6.6	43.5	49.8	100.0
大 学	39.3	41.7	17.6	1.4	100.0
専 門	10.2	56.9	37.4	0.5	100.0
実 業	0.5	31.4	50.0	18.1	100.0
中 学	0.6	9.5	57.3	32.6	100.0

術	高 小	0.0	14.4	34.1	51.5	100.0
	尋 小	—	8.4	15.4	76.2	100.0
	全 件	0.4	14.2	27.1	58.3	100.0

(出典：表17に同じ)

義務教育のあと、さらに上級学校に進学し、より高い学歴を取得することの重要性は、家業を継承する商家や農家の長男の場合にも、次第に認識されるようになっていく。農業や商業を、より発展的に営むためにという「手段性」の意識もあったかも知れない。しかしそれ以上に、中・高等教育の機会が拡大し、社会・経済的に地域の上層ないし中の上層とみなされる人たちの間に、中・高等教育機関への進学者がふえはじめると、中・高等教育をうけていることが次第に、地域社会のなかでの人々の地位の表象として、重要性をもちはじめると、昭和初期はそうした形で、学歴主義が、商家や農家のような、近代組織の外で生活する人々の生活世界にも急速に浸透しはじめた時期とみることができる。

第2次大戦後、学制改革によって中・高等教育の機会が

一挙に拡大しただけでなく、経済の高度成長により企業を中心に、近代組織の世界は急速な広がりを見せた。高い学歴を取得した人々はより可動的になり、経済成長は、農家・商家の双方について、その存立基盤を掘りくずし、家業の継承を困難にした。こうして旧中産階級の解体の進む一方で、新中産階級は肥大の一途をたどり、俸給・賃金生活者が労働人口の多数をしめるようになり、人々の意識もまた「一億総中流化」がいわれるほどに、「新中産階級化」してきた。学歴主義の支配はこうして社会全体にひろがり、商家や農家についても、教育や学歴についての価値観の変化をもたらしていくのだが、第2次大戦後のそうした変化の分析は、ここでの範囲をこえている。

その戦後の問題をふくめて、残された問題は多い。とくに篠山という一地域での、少数のケースについての分析の結果を、わが国の社会や経済、文化、さらには教育の全体的な変動とどう結びつけ、そのなかにどう位置づけ、生活世界の学校化、学歴主義的な秩序の形成のトータルな過程をどうとらえていくのかは、今後のもっとも重要な研究の課題として残されている。 (天野郁夫)